田中一郎（偽名）の華麗なる人生（笑）

ランドスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

田中一郎（偽名）の華麗なる人生（笑）

【Ｎコード】

Ｎ９０１４Ｇ

【作者名】

ランドスター

【あらすじ】

この小説は最強かつチートなオリ主（笑）が出てきます。その類に虫唾がはしる方はご遠慮ください。基本的にネタですが、たまにシリアスな感じになるかもしれません。

1．衛宮家の日常

「暗い～部屋の中ぁ～。パソコンを見つめぇ、一人奇声を上げるワシ。ハァァ！（　。Д　。）」

「……何やってるんだ？」

「秋ぃ～山ぁ～、森乃進のモノマネだっとぉ～……思うよぉ～。ハァァ！（　。Д　。）」

奇異の視線を向けて来る衛宮君。どうやらワシに惚れたらしい。フッ、何て罪なワシ……。

「おい、今何か凄い誤解された気がしたんだが」

「はっはっは、そう恥ずかしがるなよ。お前が俺の事を好きなのは周知の事実なんだからさ」

正直迷惑だよ。俺までホモと思われちまう。だから、君の愛には答えられない（キリッ

「はぁ！？　何言ってんだよお前！　てゆうか周知って誰！？　誰が知ってんだよ！？」

「えっと……冬木の虎さんと、ま…きり？　さんと、タキワザさん

かな？」

衛宮君はｏｒｚ状態になり、小声で「最悪だ……藤ねぇと桜だったら絶対信じてるよ。ていうかタキワザさんって誰だよ……」とか呟いている。

タキワザさんを知らんとは……こやつ、モグリだな。魔道に精通する者なら誰もが知っているというのに。

説明しよう。タキワザさんは白髪紅眼のアルビノであり、魔術回路は５３万本という規格外の『魔法使い』である。（平均的な魔術回路の数は２０本。ちなみに衛宮士郎は２７本）

魔法使いと呼ばれる所以は、一度見た魔術なし魔法を自分のものにすることが出来るからで、その実力は死徒二十七祖第五位を秒殺したＯＲＴにも並ぶとされている。

普段はマイペースで無気力だが、困っている人を見捨てておけないお人好し一面を持つ。その所為か、よくモテる。だが本人は朴念仁なので決して気づかない。

総合して言えば、タキワザさんは『めっさ強くて、めっさ優しくて、めっさ凄い』人なのだ。ちなみに得意技は主人公補正。

「衛宮君、良い感じに落ち込んでるとこ悪いけど、さっきの冗談だから」

「え？　な、何だ冗談か……良かった。それはそうと、前にも言ったが桜の苗字は間桐（まとう）だぞ」

「あの子の苗字読みにくいんだよッ！！」

国語は苦手です。特に、漢字とアレ（〇〇字以内で書きなさい的なヤツ）が。

「はぁ……飯、食うか」

「ＨＡＨＡＨＡ、そうだね」

叫んだら余計に腹が減っちゃったよ。

「「いただきます」」

居間のテーブルを挟み、衛宮君が上座、俺は下座に座っている。衛宮君の左右は冬木の虎さんと間桐さんに固められているので、俺が入る余地はない。（最も、ヤローの隣なんて頼まれても嫌だが それはそうと、いつも朝早くから衛宮君と朝食を作っている（イチャ×２しているとも言う）間桐さんは今日は風邪で休みらしい。ぶっちゃけ風邪引いてでも来そうなのに、珍しい事もあるもんだ。冬木の虎さんはそろそろだろ――「おはよーー士郎！！」――ほら来た。……てゆうか俺に挨拶なしですか、そうですか。アウトオブ眼中ですね、分かります。

「センセー、無視はいけないと思います」

「あっ、ごめんごめん。全然気づかなかったよ」

全然気づかなかった＝影が薄い＝空気＝本田（遊●王的な意味で

……ｏｒｚ

「チクショオ……チクショオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！　こんな家出てってやるーーーーー！！！」

「おっ、おい！　飯食わないのかー！？」

後ろで何か言ってるが無視だ。ジゴロで朴念仁の貴様に、本田と同一視される俺の気持ちが分かってたまるかッ！！

＊　＊　＊

ふぅ……勢いで出てきたは良いものの、特にする事がない。それに、さっきから腹がグゥグゥなってしょうがない。
パンの焼ける香ばしい匂いが鼻を燻ぶる。食べたいのは山々だが、生憎持ち合わせが無い。

「財布持ってくりゃあ良かった……」

商店街をトボトボと歩きながら、当てもなく彷徨い続ける。今日の天気が曇りで良かった。晴れてたら色々と面倒だからな。
ぶっちゃけ衛宮宅に帰れば良いだけだが、捨てゼリフを吐いただけに返り辛い。……つーか恥ずかしすぎる。

「あら、衛宮君とこの居候じゃないか。その様子だと、またやらかしたのかい？」

「またって……」

まぁ、そうなんだけど。

「どうせ一方的に逆ギレしたんでしょ？」

「人聞きの悪い。私は教育的指導をだね「はいはい」……（ーωー）」

な、なんてやつだ。人の話を全く聞きやがらない。おっ、俺が本田だからか？　空気だからかッ！？

「チクショオ……チクショオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

「はっはっはっは！　元気だねぇ～」

＊　＊　＊

俺は走り続けた。気がつけば学校に行く時間になっていた。腹が減った。何で俺走ってたんだっけ？　……まぁいいか。

「帰ろ」

帰りしなに学校の前を通ると、学園一のイケメン（笑）と出会った。なので、適当に相手をしておいた。

「ヘイッ、ワカメ、ワカメッ、頭がワカメッ！　青色ワカメッ！！（神懸かり的な韻を踏みつつ）」

女を囲っているワカメの周りを、頭上で手を叩きながら『ゆっくりしていってね顔』で周り続ける。
女達は「キャー！　変態よー！！」的な事を言ってワカメから離れていった。どうやら俺の神々しさに耐え切れなくなったらしい。フッ、なんて罪な俺。

「なっ、何だいきなり！　喧嘩売ってるのか！？」

「何を言ってるんだい？　これは君がさらなるイケメンへと昇華する為の儀式じゃないか」

途中に回転も加える。これによって、『B』が『B＋＋』となるのだ。

分かりやすく言えば、深爪の痛みが小指を箪笥の角でぶつけた痛みになる感じ。痛いよね、アレ。

「意味分かんないんだよ！　それに俺は元々イケメン（笑）だっ！　っておい！　（笑）を付けるなあああああああああああああ！！！！！」

「校門の中心で愛を叫ぶ（笑）……うん、いい小説が書けそうだ」

第一章の題名は『イケメン（笑）』にしよう。

「あ、遠坂　凛だ」

「どこだ！？」

キョロキョロするワカメちゃん。うん、変態チックでいいね。

さてと、ワカメ弄りも飽きたし帰るか。

「じゃ、ワカメ。俺はそろそろ帰るから」

「ワカメ言うな！」

たぶん無理です。ヤムチャがベジータに勝つくらい無理です。

「ああ、それはそうと慎二君」

「な、何だよ。いきなり真顔になるなよ」

ちょっとシリアスっぽくしてみる。今の俺はガチでイケメン（キワミ）だろう。

（キワミ）の意味は各自で考えましょう。ちなみに、フタエノキワミアッー！！　とは一切関係ありません。どちらかと言えば、メケーモの方が近いです。

「君、死相が出てるよ。幼女と半裸でガチムチの二人組と親族の方々には十分注意しましょう。友達に助けを求めると吉かもねっ☆」

「親族はともかく、幼女と半裸のガチムチの二人組なんている訳ないだろ！」

「ははっ、そりゃそうだ」

ぶっちゃけ、ただの勘だし。

「それじゃ、俺は帰ろうかな。慎二君も朝練なんだろ？」

「僕はいいのさ」

そう言って、髪をかき上げる慎二君。うん、キモイね。マジで半分くらい死ねばいいのに。残りの半分は美味しく頂くから、衛宮君が。

＊　＊　＊

「ただいま～」

玄関を開き、無造作に靴を脱ぎ棄て居間に行こうとしたら、衛宮君とばったり出くわした。

「お帰りって、今から飯食うのか？　確実に遅刻するぞ」

「病院に行くんで送れます」

「またズル休みかよ……藤ねぇが怒るぞ」

衛宮君は溜め息を吐き、あからさまに呆れかえる。
ふっ、俺には最終奥儀があるから大丈夫さ。

「……グァッ！　クッ、静まれ俺の右腕――ッ！！」

眼の前の生物を喰らおうと、暴れる右腕を左手で抑えつける。
静まれ……静まれ…静まれ……静まれ……静まれチクショウッ！！

「はいはい、邪気眼はもういいから早く着替えて来いよ」

「ちょっｗｗｗおまｗｗｗｗ」

チッ、こうなったら体温計を摩擦熱で温めて４２．０℃というキチ●イな高熱を叩きだすしかないか……。

やろうとしたら衛宮君に殴られました。痛かった。

結局、衛宮君を説得して２時間目から行く事にしました（まる

あとがき

ネタかつカオスな一話をお届けいたしました。

たぶんずっとこんな感じです（ー ω ー）

2．オネーサマコワイ

学校が始まってる時間に制服姿で歩いてると不良って思われるよね。
ほら、今も主婦の人達がヒソヒソと何か話してるよ。
クソッ、俺のクリーンでナイーブでオリーブオイルなイメージがダウンしてしまうじゃないか。……何を言いたいのかは俺にもわからん。

「あ、英語の宿題忘れた」

英語は二時間目だったな。よし、サボろう。
今来た道をUターン。近くのコンビニで暇を潰す事にした。

「ジャンプでも見るか」

そういえば、衛宮君は『正義の味方』になりたいという素晴らしい夢があるのに、少年ジャンプ読まないからな。
ザ・ワールドのポーズを取って「何それ？」的な顔をされた時は死にたくなった。学校の先生をお母さんって呼んだ時ぐらい死にたくなった。

ヴー、ヴー――――

そんな事を考えていると携帯が震えだした。
取り出し見てみると、どうやら電話の方だったので直ぐに通話ボタンを押す。
チッ、誰だ。俺の優雅な一時ージャンプタイムーを汚す奴は何人たりとも許さんぞ！　例えタキワザさんでもーーー

「誰だコノヤロ――――おねぇさまあああああああああああああああああ！！！？？？」

ちょっ、何で！？　何でオネーサマが俺の携帯の番号知ってんだ！？

「は？　いっ、いえコノヤローなどと申した覚えは御座いませぬ。優雅でふつくしいお姉様にそんな事言う訳無いじゃございませんか」

コンビニの店員がビックリした様子でこっちを見ている。店長らしきハゲは無言の威圧を俺にかけていた。
しかし、俺はそれを気にする余裕がない。冷汗がダラダラと垂れ、引き攣った様な笑みが一向に治らない。
「はい！」とまるで軍人のような返事をして、眼の前の本棚に何度も礼をする。

オネーサマには逆らっちゃならんのだ。俺には二人姉がいるんだが、特に長女の方には絶対に逆らっちゃならない。
一度、調子に乗って「何時までもいい気になってんじゃねぇぞコラァ！」的な事を言ったら、世にも恐ろしい鬼ごっこをさせられました。ええ、死ぬ思いでした。つーか死にました。

アレはトラウマだった。ボロボロになって号泣&土下座する俺の頭を踏みつけて笑っていたオネーサマはドSすら生ぬるいと思う。ぶっちゃけドSとかじゃなくて、ただ単に鬼畜なだけなのかもしれない。いや、絶対そうだ！　そうに決まってる！！　むしろ悪魔だ！！！

「それでオネーサマ！　私めに一体何の御用でしょうか？　え？　いやいやいやっ！　そんな事思ってませんよぉぉ！？　オネーサマが悪魔だなんてそんな滅相もない！！！」

怖いよ……後で絶対着信拒否にしてやる。いや、したら逆に殺されるな……。でも心臓に悪すぎるよ……マジで。いやマジでぇ！！

「ええ……はい…はぁ……はい……わかりました」

通話が途切れたのを確認し、自身も電源のボタンを押して携帯を仕舞う。

「はぁ……疲れた」

肉まんを買い、コンビニを出る。ゆっくりと学校へ歩を進めながら、大きく欠伸をした。
肉まんを袋から取り出し、一口齧る。うん、美味い。やっぱり肉まんはセ●ンイ●ブンだね。

「それにしても、随分と厄介な所だったんだなぁ～」

冬木市。オネーサマの話では、近々聖杯戦争とか言うお祭りが開催されるらしい。
セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、バーサーカー、アサシンの7人のサーヴァントを7人のマスターが従えて行われる殺し合い。
面白そうだから、それに参加しろと言って来る姉。死ねってか？
俺に死ねってか！？　……まぁ、死なないんだけどね。

確かに面白そうではある。でも、部外者の俺が勝手にやっちゃっていいんだろうか？
こう言うのって色々手続き的な物がいりそうな気がしないでもない。
すいません、一応魔術師なんですけど田舎者なんで。あ、でもタキワザさんは知ってますよ。
まぁいいか。適当にやって適当に戦って適当に殺して適当に楽しんで適当に終わらせたらいいんだし。
別に魔術協会に入ってる訳でもないから、口うるさく言われる事もないしな。あんまり滅茶苦茶したら殺されそうだけど。

「あ、冬木で殺し合いって事は、おお！　良かったね衛宮君。正義の味方になれるよ」

よし、今の内に使い捨てカメラを沢山買っておかなければ。衛宮君、アンタの雄姿は俺が全部撮ってやるＺＥ！

携帯で時間を確認すると、すっかり１０時を回っていた。

「おっと、そろそろ２時間目も終わりか」

カメラは帰りしに買うとして、そろそろ学校に行った方がよさそうだ。

ああ見えて衛宮君は心配性だからなぁ。これがふつくしい女性とかだったら最高だったのに。ヤローとかマジないわぁ……。

「衛宮君も聖杯戦争に出るのかねぇ……今度聞いてみるか」

＊　＊　＊

三時間目をちゃんと受けた後、休み時間を利用して衛宮君に聖杯戦争の事を聞いてみた。
どうやら衛宮君のクラスは四時間目は体育らしく、クラスにはもう衛宮君しか残っていない。

「聖杯戦争？　何だそれ？」

……あれ？

「いや、今度冬木市で開かれるお祭りだよ。知らないのか？」

衛宮君は首を横に振った。どうやら本当に知らないらしい。
あれぇ……衛宮君ってモグリだけど一応魔術師だよねぇ。冬木市出身だよねぇ。何で知らないの？
はっ！　ま、まさかオネーサマ……あれは俺をおちょくる為の嘘……（ー３ー＃）ビキビキ

バキィ！！――――衛宮君の机が俺の拳によって真っ二つになった。

「ちょっ、俺の机！　何やってんだよ！！」

「いやね、オネーサマの悪戯にムカッ腹が立ちまして……」

「だったらそのオネーサマに復讐すればいいだろ！？」

「無理に決まってんだろうが！！　アレだよ！？　文句言っただけで平気で弟を半殺しにして来る人だよ！？」

この前も時計塔で何かやらかしたらしい。てゆうかさ、姉妹喧嘩で時計塔半壊ってどうよ？　もうアンタら人間じゃねぇよ。

「逆ギレするな！　はぁ……で、どうするんだよコレ？」

「知りません。ジェバンニが一晩でやってくれます」

「何を？」

「知りません。ジェバンニが一晩でやってくれます」

無限ループって怖いね。

「……ジェバンニって誰？」

「別名：衛宮士郎。将来の夢は正義の味方という、少年の心を忘れない好青年。その割にはジャンプを読まないという規格外の人物。特技は料理や物の修理」

「説明ありがとう。で、一番でやるのは俺って事なんだな？」

「はい、そうです。本当にありがとうございました」

「……お前、今日飯抜きな？」

「なん、だと……？」

俺に死ねと言うのか！？　なんて奴だ……。
オネーサマに絶壁に立たされて、いきなり背中押された時くらいの絶望と恐怖を俺に味わえと言うのか！？
あれは怖かった。押されて咄嗟に振り返った時のオネーサマの満面の笑みが今でも忘れられない。

「それが嫌だったらお前がやれ。ほら、俺も手伝うからさ」

「……わかったよ。本当に世話が掛かるな、衛宮君は」

「それは俺の台詞だバカ」

軽口を言い合いながら、俺は魔術を用いて机を修復する。後は士郎が解析し、問題が無ければ終了だ。

「わざわざすまないねぇ、衛宮君」

「はいはい。じゃあ、そろそろ時間もヤバいから俺は行くな」

「あいよ。体育頑張ってねぇ～」

衛宮君は振り帰らずに「はいはい」と生返事をして教室から出て行った。

「さて、俺も戻りますか――――？」

感じる……感じるぞ。隠れて俺を見る熱い視線をおおおおおおおおおおおおお！！！！
ふふっ、ふふふふふふ……衛宮君とま…とうさんのイチャラブごっこに憧れ殺意を覚える事数ヶ月、遂に俺にも春が来たあああああああああああああ！！！

「誰だい？　隠れてないで出ておいでぇ。へへっ、ふふふへへへへへへへ……」

感じるぜぇ……これは美少女の匂いだぁ……ジュルリ。
……はっ！　落ち着け俺。これじゃあまるで変質者じゃないか。ビークールだ、びーくーる……
衛宮君と違って俺にはジゴロ属性が無いからな。慎重にいかないと。

「オッホン……えー、隠れて俺を見てる人。すいませんが出てきて

もらえません？」

結局、チャイムが鳴っても現れる事はなかった。クソッ、俺の春がぁぁぁぁ……。

何となく悲しくなったので、適当に呟いておこう。

「覗き見なんて感心しないな、遠坂さん」

あとがき

特に無しです。ゴメンナサイ。

3．サーヴァントを召喚しました

聖杯戦争。どうやらマジだったらしい。

一週間ほど前にオネーサマから聞いた荒唐無稽な、まるで冗談のような話。

こんな平穏で、平和を地で言っているような都市に殺し合いなんて起きるとは到底思えなかった。

衛宮君は魔術師にも関わらず、聖杯戦争すら知らない始末。

その内オネーサマから「釣りですた（笑）」的な内容のメールが送られてくると思いつつ、日々を暮らしてたんですよ。

多少の違和感はあったんです。何か忘れているような……そんな感覚が。

それが決定的となったのは、遠坂さんと学校で出くわした時でした。

遠坂さんの近くにいるのだ、サーヴァントが。姿が見えないのは、恐らく不可視にしているのだろう。

絶対目なんて合わせません。何と言うか、合わせただけでタマとられそうだし。何より、基本的に魔術師は身内以外信用しないタチなんで。

それにしても、前の覗き事件の辺りから遠坂さんにヤケに警戒されているような気がする。

現在進行形で軽く睨まれてるし、俺に対して一切隙を見せない。こやつ……出来るッ！！　……ごめんなさい、言ってみたかっただけです。

一度も話した事無いのにこの有り様……酷くね？　もしかして、俺の変態モードが見られたのか！？

ヤバイ、ヤバ過ぎるッ！！　その内女子全員から「キモイ死ね」とか言われるかもしれん。もしそんな事になったら――――

「グハァッ！！」

クッ、遠坂……さすがエリート魔術師。話し掛けもせず、俺の心にこれほどの深手を負わすとは……。

「遠坂め、許さんぞぉ！！」

良く分からない復讐心に目覚めた。５分経ったら忘れた。

＊　＊　＊

今日は曇りなので、屋上にいても平気です。
太陽は嫌いだ。細かく言えば、紫外線が嫌いだ。自分、アルビノなんで。外見は見事にタキワザさんと被ってるからな、俺。ふっ、羨ましいだろう。
白髪紅眼のアルビノ。肌が病的なまでに白いのはタキワザさんっぽくないが、先天的なものなので仕方ない。
身長は……切り上げたら１７０ｃｍある。ちなみにタキワザさんは１８６ｃｍのモデル体系です。クッ、このままじゃタキワザさんになれないじゃないかッ！！

「やっぱり此処にいたのか」

そんな事を考えてたら衛宮君がやって来ました。
衛宮君の方から俺に会いに来るとは、珍しい事もあるもんだ。

「おお、衛宮君じゃないか。折角の昼休みなんだから、俺の所じゃなくてま…きりさんの所に行ってやった方がいいんじゃない？」

好感度的な意味で。ああ、もうすでにメーター振り切ってるから放っておいていいんですね、ははは……これだからジゴロは（ｒｙ

「お前に弁当を渡すの忘れてたから。後、まきりじゃなくて間桐な」

「あの子の苗字呼びにくいんだよッ！！」

「はいはい、わかったから」

衛宮君も中々スルースキルが向上してきたな。嬉しいやら悲しいやら……お父さん困っちゃうわ。

「前から言おうと思ってたんだけど、そんなに苗字が呼びにくいなら名前で呼べばいいのに」

「なん、だと……？」

こいつは言っちゃならない事を言った。言っちゃならない事を言ったァァァァ！！！（大事なことなので二回言います

「衛宮士郎オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

「ぐあっ！　いきなり耳元で叫ぶな！！」

「貴様は言っちゃならない事を言ったアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

ジゴロ（衛宮君）の胸倉を掴み、ガクガクと揺さぶる。
君がっ、謝るまでっ、俺はっ、揺さぶるのをっ、やめないッ！！！

「なっ、何だよ言っちゃならない事ってぇ！？」

「お前なぁっ、俺が間桐さんに「苗字呼びにくいから名前で呼んでいい？」って聞いて何て言われたか分かるかアアアアアアアアア！！？？」

「何てっ、言われたんだよぉ！？」

「満面の笑みで「嫌です☆」だぞ！？　そう言われて俺はどう返事すりゃあ良いんだあああアアアアアアあアアアア！！！？？？」

あの時はガチで泣いた。自分の部屋で枕を濡らした。１０分経ったら忘れた。

「……ごめん」

「謝るなよ。余計悲しくなる……」

胸倉から手を放し、哀れみ１００％の視線をこちらに向けて来る衛宮君の目から逃れるように背を向ける。
クソッ、空が滲んでやがるぜ……。

「こうなったらヤケ食いだチクショウ。衛宮君、弁当プリーズ！」

衛宮君から弁当をぶん盗り、乱暴に蓋を開けてガツガツとかっ込む。途中、何度も喉に詰まらせたが、衛宮君が毎度いいタイミングでお茶を渡してくれたので事なきを得た。さすが衛宮君。一家に一人欲しいね。

＊　＊　＊

何となくダルかったので、午後からの授業はボイコットしました。退学の心配はありません。ちゃんと正規ルートで早退したんで。（保健室→体温計→熱がある→帰りましょう……計画通りっ

衛宮宅に帰り、鞄を置いて制服からジャージへと着替える。自室の隅に置いてある小包を開き、数本の毛髪が入っている小さなケースをポケットに入れる。
これは数日前、オネーサマから速達で届けられたものだ。オネーサマが言うには、サーヴァントの召喚に一役買っているそうだ。
休む間もなくすぐに外出し、人気の全く無い廃墟の館を目指す。

腰の辺りまである草を手で掻き分け、傾いた館の扉を蹴破る。誰も済んでいないのは確認済みだ。
儀式には、ほどよい広さの応接室を使う。ソファーとテーブルを退け、念の為に結界を敷いておく。気配を探知するだけの結界だが、無いよりはましだろう。

「さて、と。お祭りを始めますか———」

人差し指の先端を軽く齧り、血を数滴床へ垂らして魔方陣が展開させる。

「こういう堅苦しい魔術は苦手なんだよねぇ……」

えーっと……あり？　何て詠唱すればいいんだっけ……まぁいいや。適当にやりゃあ出てくるだろ。

「出て来いサーヴァント！！　俺と一緒に戦ってくれぇーー！！」

気分はドラゴン●ールの神龍を呼ぶ感じ。
俺の祈りが通じたのか、魔法陣からローブを被った女性が現れた。
深くローブを被っているので顔はよく見えないが、恐らく美人だろう。俺の勘がそう告げている。
一度は終わったと思っていた春だったけど、俺の人生もまだまだ捨てたもんじゃないね！　俺の春はここから始まるのＳＡ！！

「貴方が私のマスターかしら？」

「はいっ。お互い優勝目指して頑張りしょう！！」

右手を天に掲げ、彼女に背を向けて大声を張り上げる。ふっ、決まったな……。
掴みは完璧。後は時間を掛けて親密になっていけば――――ッ！？

「ガッ……ぁ？」

一瞬、何が起きたか分からなかった。下腹部の辺りに感じた激痛と共に、視界が下へと降りて行く。
ドサリと床に倒れ、顔面を強打した。下腹部と顔面の痛みに顔を顰めながら、両手を使って仰向けになり状況を確認する。
数メートル先にある俺の下半身。どうやら今の俺は上半身だけらしい。ははっ、通りで床が真っ赤な訳だ。それにクソ痛ぇし。
サーヴァントである女性に目を向けると、そいつはマスターである

俺を見下して嗤っていた。

「おいおい、何のマネっすか？　こういうのは物語中盤で起こるイベントっしょ？」

序盤でこの類のイベントが起こると碌な事がない。十中八九、裏切りフラグ。うはぁ……最悪だ。こんなに美人なのに。
せっかく春が来たと思ったのになぁ……ついてねぇよ、ったく。

「あら、死ぬ間際にしては余裕そうね。まぁどうでもいいけど」

女は興味なさげに言うと、懐から歪な形の短剣を取り出した。そして、それを俺の胸に突き刺す。
まるで針に刺されたかのような小さな痛み。それと同時に、彼女と繋がっていたラインが切れるのを感じた。

「貴方とのラインを切らせてもらったわ。それにしても、これほど上手くいくとは思わなかったわ」

「まさか召喚した直後に裏切られるたぁ思わなかったんでね。基本的にお兄さん、ふつくしい女性には弱いんで――ッ、ゴホッ、ゴホッ……」

やべぇな……意識が朦朧として来やがった。ああ、口の中が鉄くせ

え……。

「ふふっ、褒め言葉と受け取っておくわ。それにしても坊や、若輩にしては随分な魔力量じゃない」

先ほどとは打って変わって、興味深そうに呟く女。魔力量なんかに興味を持つって事は、十中八九こいつはキャスターだな。魔術師の連中はどいつもこいつも考える事が一緒だな。テンプレ乙。

「そりゃどうも。オネーサマからもよく言われますよ」

「貴方が死んだらその身体、モルモットとして使ってあげるわ」

「ハッ、ハハハハハハハ……そりゃ無理だな」

夥しいほどの血を口から吐き出しても尚、肩を揺らして俺は嗤う。可笑しそうに、楽しそうに、嬉しそうに。

「やっぱり貴方……いらないわ」

そんな俺の様子が気に入らなかったのか、女は魔術によって光弾を作り出した。
一工程（シングルアクション）。さすがキャスターの英霊と言うべきか。一見ただの綺麗な球だが、殺傷能力はそれこそ過剰極まりない代物だろう。

「俺を殺すのか。いいよ、別に。ああ、でも一つだけ言っておく」

心が冷めていく。眼の前の女が、とても価値の無いモノに思えてくる。

俺は恐らく血走っているだろう目を女に向けて見開き、裂けんばかりに口元を吊り上げた。

「俺を殺したお前は俺が絶対、俺が必ずぶっ殺す。ま、楽しみにしててよ」

言い終わり、ケラケラと愉快に嗤う俺を女は容赦無く吹っ飛ばした。

最後に――――

「これから死ぬのに復讐なんて出来る訳ないでしょう――――」

なんて女が言っていた。ははっ、それがねぇ……出来るんだよ。

＊　＊　＊

痛みすら感じない。五感全てが停止し、無へと還るような感覚。だが、それも数秒で終わりを告げる。
心地よい浮遊感が無くなり、再び五感が稼働し出す。まるでビデオの巻き戻しみたく、徐々に痛みが強くなり、やがてそれも消えていく。
ゆっくりと目を開くと、身体はすっかり再生し、床にボロボロのジャージ姿で大の字になって転がっていた。

起き上がり、身体の節々を確認する。どうやら、いつも通り再生出来たようだ。
それにしても、身体を肉片に変えられたのなんて何時以来だろう。
久々にトリップしちゃったよ。

「もしかしてオネーサマ……俺が死なないのをいい事に、狙ってやがったな」

何て奴だ……。確かに死なないのは死なないけど、一応痛いし苦しいし魔力だって消費するんだぞ。

立ち上がり、外を見る。すると太陽は大分傾き、空は赤く染まっていた。

「ちょっと再生に時間掛け過ぎたな。でも、楽しみが増えた事だし良しとしよう」

あの女、キャスターだったか。あいつは絶対殺す。誰が何と言おうと殺す。俺が殺す。八つ裂きにして殺す。
俺を殺した奴は必ず殺す。これは、俺の数少ない自身へのルール。
オネーサマが例の禁句を言った奴をぶっ殺しているように、俺にもそういうのが何個かある。
ぶっちゃけ守らなくてもいいんだけど、それだと人生が詰まらないし、何より俺の腹の虫が治まらない。だってさ、やられっぱなしってムカツかね？
一応例外があったりもする。俺の死を上回る程に気に入った奴は生かすし、そいつがピンチになったら気分しだいで助けたりもします。
まぁそんな事、今までに1度たりとも無かったけど。

「後、オネーサマにもビシッと言っておかなと……そのうち」

気が向いたらでいいや。というか、今掛けて文句言っても爆笑されそうでヤダ。
弟が殺されるのを喜ぶ姉……うん、最悪だね。

「はぁ……腹減ったな」

もう帰ろ。そういや、今日のご飯はハンバーグだったな。目玉焼きが乗ってますように……。

あとがき

まさかの3話目。もしかしたら続くかも。

主人公チートです。魔法使いです。封印指定です。俺Ｔｕｅｅｅｅｅ！！です。

＜作者の原作知識＞

Ｆａｔｅ－それなりにド忘れしてる

空の境界－ほとんど忘れた

月姫－やった事無い。ｗｉｋｉｐｅｄｉａ情報のみ

……原作読み直した方が良いかなぁ（－ω－）

4．不死者

衛宮家に帰る途中、ジャンプを買う為コンビニに立ち寄ったので少し遅くなってしまった。
赤かった空はすっかり黒へと変わり、薄暗い夜道を蛍光灯が照らしている。

小走りで衛宮家まで辿り着いたのだが、様子がおかしい。人の気配が全くないのだ。

「あり、おかしいな。この時間なら大概衛宮君はもう帰ってるはずなのに……」

もしかしたら、いつもの悪い癖が出たのかもしれない。どうせワカメ辺りに面倒事を押し付けられているのだろう。
仕方ない。ヤローってのが不愉快だが、迎えに行ってやるか。

そう思い、玄関から踵を返した時だった。
ドクンと心臓が跳ね、やけに胸がムカムカする。全身の細胞が、俺に学校へ行けと急かしてくる。まるで、其処に何かがあると言わんばかりに。

「――何だか嫌な予感がするな……急いだ方がよさそうだ」

良い意味でも悪い意味でも、俺の第六感は良く当たる。用心に越し

たことはない。
鍵が無かったので、玄関を蹴破る。他にも手はあったかもしれないが、今はあまり時間を掛けたくない。ごめん衛宮君、後で直すから。ジャンプを玄関に投げ捨て、急いで台所に向かう。そして、刃渡り２０ｃｍほどの刺身包丁を手に取った。
それを右手に持って振りかぶり、左手首を斬り落とす。まるで噴水のように勢いよく噴き出す血を眺めつつ、ポツリと呟く。

「……これでいいか」

斬り落とされた手首はすぐに再生し、溢れ出た血痕も一滴残さず俺の体内へと戻った。まるで、時間が巻き戻ったかのように。
蹴破られた玄関を飛び出した。
ボロボロのジャージ姿をどうにかしたかったが、この分だと一分一秒無駄にしない方がいい。

「Ｉ　ｒｅｉｎｆｏｒｃｅ　ａ　ｌｉｔｔｌｅ．　Ｔｈｅ　ｏｂｊｅｃｔ　ｉｓ　ｏｎｅｓｅｌｆ．（ちょっと強化。対象は自分――）」

強化魔術で全身を強化する。特に、脚力を重点的に強化する。
自分で言うのもなんだが、強化魔術なら他の魔術師にも、例えオネーサマでも絶対に負ける気がしない。
強化魔術は基礎中の基礎であり、その仕組みも単純明快だ。それ故に、奥が深い。だからこそ、俺はこの魔術が大好きだ。

「さて、行くか――――」

天を舞う。空を翔ける。風になる。
屋根の上を跳躍し、羽のように空を駆けていく。
ここ数ヶ月ご無沙汰だった為、多少不安だったが上手く行ったようだ。
目に着いたモノ全てが一瞬で後ろへと流れていく。しかし、俺はただ一点だけを見つめる。

――――学園を。

＊　＊　＊

「おいおい……冗談だろ？」

途中から、学園にある大きな魔力二つを感じてはいた。
だが、こんな結末になるとは思わなかった。

衛宮君が死んだ。胸を一突き。即死だろう。

その近くに立つ槍を持った蒼い男。恐らくサーヴァントだろう。
内在する魔力量もそうだが、その圧倒的な威圧感と変態みたいな服装が何よりの証拠だ。

「おい変態、これはお前がやったのか？」

「変態って俺のことか？」

「当たり前だろう。そんな全身タイツみたいな恰好で夜の学園にいたら誰でもそう思うわ」

男は苦笑いを浮かべている。どうやら多少気にしていたらしい。是非凄く気にしてほしいものだ。
はっきり言って、あの服装で冬木市を歩いていたら他の都市から来

た人に冬木市を誤解されてしまう。
この街が好きな俺としては、それは何としても阻止したい。つーかする。

「まあ、服装の話は置いといてだ。お前、こいつのダチか何かか？」

「ダチって言うか、居候だね。で、何？　それでアンタは「俺の姿を見たから殺してやるぜヘイヘイ！」的な事を今からするつもりっすか？」

「……ダチが死んだってのに、随分と冷静なんだな」

おやおや、変態が呆れております。全身タイツじゃなかったらイケメンなのに……色々と残念な人だ。

「俺は怒ったぞ！　フ●ーザアアアアアアアアアアアアアア！！！！って言えば満足？」

「俺に聞くな。それとフ●ーザって誰だよ。俺はランサーだ」

やっぱりサーヴァントでした。キャスターにランサー、それと遠坂さんのサーヴァントで三体か。
この分だと、七体全て召喚終わってそうだな。という事は、もうお祭り始ってんの？

「ランサーさん、だっけ？　もう聖杯戦争始ってるんすか？」

「……聖杯戦争を知ってるってこたぁ坊主、魔術師か？」

ランサーの口が吊り上がる。全身タイツで男を見て嗤う男。すごく……イタイです。
やばいな……このランサー、ノンケでも美味しく食っちまう奴かもしれん。

「ケッ、ケツの穴はやらんぞ！！」

「いるかっ！　てか今の流れでどうやったらケツの穴が出てくるんだよっ！！」

「知りません。ジェバンニが一晩でヤッてくれます」

「何をだよッ！！」

「知りません。ジェバンニが一晩でヤッてくれます」

「だから何を———チッ、来たか」

ランサーがあから様に嫌そうな顔をする。恐らく邪魔者が来たからだろう。やはり俺のケツを狙ってやがったな。このホモ野郎。
はっ！　まさか、こいつは固有結界『ゲイパレス』を保有するサーヴァントなのかッ！？　くそっ、そんな物を発動されれば俺の、いや冬木中のノンケたちが食われてしまう……。

その様子を想像してしまった俺は、咄嗟にランサーに泣きながら土下座をしていた。

「ランサー、頼む！　ゲイパレスだけはっ、ゲイパレスだけは勘弁してくれぇ！！」

「知らねぇよ！　何だよゲイパレスって！？　それと、俺はホモじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

ランサーの咆哮が虚しく校舎に響いた。

「はぁはぁはぁ……とにかくだ、俺の姿を見た奴は消せとの命令なんでな。悪く思うなよ」

「うわぁ、あから様な話題転換だよ……」

「うっせぇ！！　あ～～クソッ、調子の狂うガキだぜ。ったく……」

乱暴に頭を掻き、ランサーは俺に槍を突き付けた。

「お遊びはここまでだ、坊主。せめてもの情けだ。抵抗しないなら楽に死なせてやる」

「マジっすか？　じゃあそれでお願いします！」

どうせ死なないんで。

「……死ぬのが怖くねぇのか？」

「さあね。友達が殺されておかしくなってるだけかもよ？」

「……すまねぇな」

罰が悪そうに呟き、悲しそうな顔をするランサー。そんな顔されても許しません。

ふつくしい女性だったら許すかもだけど、ヤローの時点でもうねぇよ。許すとか有り得ねぇよ。

「すまねぇな」で済んだら警察いらねんだよバカヤロォ。人のコックを勝手に殺しやがって、俺を餓死させる気かクソッタレめ。

ああ、明日からどうすりゃいいんだ……あ、衛宮が死んだら間桐さんが悲しむぞ。おいおい、これ以上間桐さんをヤンデレ化させないでくれ。

最近じゃヤンデレじゃなくてヤンデルになって来てんだよ。このままじゃその内「先輩を殺して私も死にます！」的な展開を生で見る羽目になりそうだ。……いや、先輩死んでるんだけどね。

「ランサーだったな。お前は絶対俺が殺す」

それにしても、キャスターに続いてランサーにも殺される。一日で

二回も死ぬとか付いてないよなぁ……。
ま、その分お祭りが楽しくなるからいいっちゃいいんだけど。

「……ああ、じゃあな」

どうやら死ぬ間際の捨てゼリフと取ったらしい。哀れみを含んだ目で、俺の胸を一突き。
見事に心臓を貫き、背中まで貫通させるとランサーは槍を引き抜き、バツの悪そうな顔をして去って行った。

「あーあ、衛宮君死んじゃったよ。結構イイ奴だったのになぁ……」

ここでブチ切れない辺り、俺ってやっぱり薄情なんだろうか。
ランサーを殺すのだって、復讐とかと少し違うしな……うん、俺って最低だな。別にいいけど。

「……寝よ」

どうせ衛宮家に帰っても誰もいない。明日辺り、衛宮君の死体が発見され大騒ぎになるだろう。
俺も被害者Ａとして事情聴取され、学校は休校になるかもしれない。
間桐さんは絶望の余り泣き崩れ、それを慰める大河さんも一緒に号泣している事だろう。衛宮君と仲の良い柳洞君も泣くと思う。
ホント仲良いからね、あの二人。ぶっちゃけホモダチだったんじゃ

ないんだろうか。少なくとも、柳洞君には多少そのケが無いと言い切れない節が無い訳じゃない。

「ランサー、キャスター……どうやって殺そう」

キャスターはともかく、ランサーは難しそうだ。
あの槍はリーチがクソ長いし、傷口を見るに、どうやら呪いの類が付与されている。十中八九、魔槍だろう。

不意に、足音が聞こえた。気配は二つ。
この場は気絶したフリでもしておくか。傷口もそのままにしておこう……痛いのは我慢だ、我慢。

「嘘……でしょ」

声を聞く限り、恐らく遠坂さんだ。もう一人は———くそ、うつ伏せだと見えない。
遠坂さんはともかく、もう一人の方はかなりの手練れだ。たぶん、ちょっとでも動けば気付くだろう。
しかし、俺の死んだ振りには気付くまい。なんたって、呼吸はおろか、心臓すら止めているからな。

結局、俺の死体は放置で衛宮君だけ治して帰りやがった。……何、アイツ。俺は死んでもいいってか！？
遠坂さんが俺の事をどう思ってるかよーく、よぉ～～～～～～～～～～～く分かった。

もういいもん。不貞寝してやる。衛宮君もどうやら息を吹き返したみたいだし。良かったね、衛宮君。
傷を即行で治し、うつ伏せの体制のまま寝ようと思ったが、病み上がりの衛宮君が俺を負ぶって帰れるとは思えない。

「……はぁ。今回だけだからな」

窓を開けてから衛宮君を背負い、窓の手すりに足を掛けて跳ぶ。
全身を強化している為、なんなく着地成功。そのままグラウンドを駆け、屋根に飛び移り、その上をまた駆けて行く。
ヤローを背負うとか……最悪。あ〜、腹減ったなぁ。

＊　＊　＊

衛宮君を彼の部屋に布団を敷いて寝かせた後、俺もすぐに寝た。
どうせ衛宮君は飯を作れそうにないし、こっちも二回死んで色々と怠いしそこそこイライラしている。
殺されるのってね、結構ムカつくもんですよ。一度体験してみたら分かります。

「ふぁ～……お休みぃ」

布団も敷かず、自室に入った途端、糸が切れたように畳へダイブした。

あとがき

作者は重度の厨二病患者です。残念ながら、治る見込みはありません。

5．強敵と書いて『とも』と呼ぶ

ガシャン、とガラスが割れたような音に思わず目を覚ます。
身体を起こし、結局しまうのを忘れていた刺身包丁を手に取ると、急いで騒音の発信元へと向かった。

壊れた襖、割れた窓ガラス、そして庭でランサーこと青い変態と追いかけっこをしている衛宮君。……うん、カオスだ。
恐らく衛宮君が生きていると知ったランサーが自宅まで押し掛け、彼のア●ルをフ●ックしに来たに違いない。やはりホモじゃないと言うのは嘘だったのかランサー！！
……いや、待て。それならどうして学校でフ●ックしなかったんだ？　衛宮君を殺したと言う事は、それこそ余裕で「アッー」出来たはずだ。

「もしかすると、奴はホモじゃない……？」

なんて事を考えていたら、衛宮君が土蔵へと追い詰められていく。
どうやら、あそこが今夜の『ゲイパレス』となりそうだ。衛宮君、ゲイの世界へ掘ってらっしゃい☆
間桐さんが悲しむだろうけど、俺は君の邪魔をする事は出来ない。
いや、したくない。だって、今あの土蔵に入ったら俺まで「アッー」されそうで……ねぇ？

「衛宮君、Ｌｉｖｅ　ｂｅｔｔｅｒ（歪みなく生きろ）！！」

……さて、俺はもう一眠りするか。明日からは衛宮に背後を取られないようにしないと。俺のケツを容赦無く狙ってくるかもしれんからな。

「――――なんて、ホモネタはここら辺にしとこうか」

目を瞑り、ふざけた思考を打ち切る。さて、そろそろ本格的にお祭りを始めようじゃないか。
床に散らばった硝子を踏みつぶし、小気味の良い音を立てながら、割れた窓から庭に出て土蔵へと歩を進めていく。
走らず、あくまでゆっくりと。全身を強化し、右手に持つ凶器を強化し、徐々に歩く速度を上げる。

「俺にシリアスな空気は似合わないんだけどねぇ……」

呟き、溜息を漏らす。しかし、そんな言葉とは裏腹に顔は酷く愉快そうに嗤っている。
今からランサーと殺り合うのだ。俺を殺した奴と、今から――――！！！

「はっ、ははっ、やっぱり、やっぱりこの瞬間は最高だよ」

ランサーが此処へ来た目的。恐らくは何らかの理由で生存していた衛宮士郎の抹殺。
俺の事は気づいていないのか、それとも衛宮士郎を殺した後に殺す予定なのか。
それとも確率は低いが、殺害現場を確認した後、俺の死体は処理されたと考え俺の存在はノーマークなのか。他にも――――
思いつく限りの可能性が頭の中を駆け抜ける。だが、そんなモノ今考えたってしょうがない。だって、奴はもうそこにいるんだから。

「行くか――――」

爆発的な加速力で土蔵に突っ込もうとしたためか、地面を蹴った場所に大きな砂塵が巻き起こる。
十数メートルあった距離も一瞬でゼロにし、そのまま土蔵に飛び込もうとしたその時だった。
淡い光が土蔵の中で発生し、その数秒後にランサーと鎧を着込んだ金髪の女が扉をぶち破って出て来たのだ。
そして庭でバトル開始。どうやら、若干金髪少女のが押してるっぽいです。そんな事よりさ、俺は無視っすか？　放置プレイっすか？
　ああ、そうですか。

「……なぁにこれぇ」

はっきり言おう。萎えた。すっごい萎えた。有り得ないくらい萎え

た。
何、あの金髪少女。いきなり出て来て人の獲物横取りとか何様っすか？　マジ有り得ないんですけど。
誰か知らんがヤローだったらぶっ殺してる所だぜ。まぁ、見た感じ可愛いから許すけど。でもね、もしランサーを殺したりしたら――――
そんな感じでイラついてたら、土蔵の中から衛宮君登場。どうやら、かなり慌てている様子。

「どったの衛宮君？　つーかあの女誰？　衛宮君のカキタレ？」
「カキ、タレ？　良く分からないけど、とにかくあの二人を止めないと！！」
「おお、さすが正義の味方。言う事が違うねぇ」

これでジャンプも読んでたら言う事無しなのに。
珍しく俺の冷やかしにも動じず、衛宮君は激戦を繰り広げている二人をただ眺めている。……いや、何とか止めようと手段を模索してるかな？
しょうがない、お兄さんが手伝って進ぜよう。別に俺がランサーを殺したいから手伝う訳じゃないよ？　……たぶん。

「そんじゃ、衛宮君。おにーさんちょっと行って来るから」
「行って来るって――――おいっ！」

衛宮君に笑顔で手を振り、二人の戦闘を眺めながら割れた窓ガラス付近まで移動する。
そこに落ちている硝子の破片を数枚拾い、手始めにそれを強化してランサーへ投擲してみる。だが、ランサー中る寸前で全て回避してみせた。まさに神業である。
こっちに気づいたのか、ランサーは戦闘を続行したまま視線だけをこちらに向けた。そして驚愕の表情を作り、しかし次の瞬間には楽しそうに笑った。

「テメェ、やっぱり生きてやがったのか！」

「まあね。それでランサー。死ぬ覚悟は出来たかな？」

出来てなくても殺すけど。あ、でも英霊だからもう死んでるのか？
どうなんだそこら辺……まぁいいや。

「死ぬ覚悟なんてなぁいつでも出来てるが坊主、お前に俺が殺せるか？」

「ははっ、面白い事言うね。お兄さんはさ、今も俺に生かされてる身なんだよ？」

「はぁ？」

ランサーは大きく飛び退き、金髪少女と距離を取る。多少イラつい

ているのか、こちらを見ているその顔の眉間に皺が寄っている。その距離を詰めようとした金髪少女を衛宮君がストップさせた。見た感じ、どうやらあの金髪少女は衛宮君のサーヴァントらしい。クソッ、羨ましい奴め。

「わからないかな？　今のお兄さんは、俺に殺される為に生かされてる身なんだ」

「ああ、わかんねぇな」

「その証拠に、お兄さんには絶対に俺は殺せない。だけど俺はお兄さんを殺せる」

どうやって殺そうかなぁ。やっぱりホモだから、ケツの穴から脳天ブチ抜いて殺すとかがいいな。うん、それで殺ろう。

「……ハッ、ハハハッ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ――――――！！！」

庭に響き渡るランサーの哄笑。右手で顔を覆い、さも可笑しいと言わんばかりに笑ってみせる。

笑うがいい。どれだけ笑おうが、この事実は変わらない。ランサー、お前が俺を殺したその時から、お前は俺に殺される運命なんだよ。

「だったら受けてみろよ――――俺の必殺を」

ランサーは槍を構えたと同時に空気が一変した。先ほどまでの張り詰めた空気がさらに重くなり、ランサーの殺意が俺へと集中していくのが分かる。
身体の全細胞が、あの槍はヤバイと訴えかけてくる。脳内に流れてくる死のイメージ。どうやら三回目は確定みたいだ。

「お好きにどうぞ。あ、でもあんまり長いのは無しね。こっちも寝起きで怠いし」

「おいっ！」

「大丈夫だって。衛宮君は心配性だなぁ～」

衛宮君が心配そうにこちらを見ていたので、適当に手を振っておいた。
ホンッッッット、ふつくしい女性だったら狂気乱舞モノなのにねぇ……ヤローとかないわぁ。いや、ありがたいんですけどね。
そんな俺のふざけた感じが気に食わなかったのか、ランサーの顔が猛獣の如く恐ろしいソレへと変貌する。うん、怖いね。

「その心臓――――貰い受ける！！」

強化で防御は……無理そうだな、こりゃ。

「刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルグ）――ッ！！」

ゲイ・ボルグ……だと？　やっぱりこいつはゲイだったのか！！
俺のア●ルをあの槍で『刺し穿つ』つもりだな！？　クソッ、何としても死守せねば！！！

咄嗟に強化した両手でケツを覆い、有り得ない速度で迫ってくる槍を横に躱す事で回避する。だが――――

「なっ！？　――――ガッ！！」

ソレは有り得ない速度を保ったまま、有り得ない角度で歪（まが）り、俺の心臓を刺し穿った。
槍は背中まで貫通し、その激痛に俺はデジャブを感じつつ、ア●ルじゃなくてよかったぁ……と心底安堵していた。

「――――ッ！！」

衛宮君が俺の名を呼んでいるが、そんな事どうでもいい。とにかく今は、俺のア●ルの無事を祝福してくれ。
ゲイ・ボルグ――――確かケルト神話の英雄クー・フーリンが持つ魔槍だっけ。じゃあ、こいつってクー・フーリンな訳か。
つーか痛い。すげぇ痛い。ずっと刺さったままとか、そろそろ抜いてほしいんですけど。

「あの〜、もういいっすか？　刺さったままは結構痛いんで」

「――ッ、オイオイ……冗談だろ？」

まるで化け物でも見たような目でこっちを見るランサー。衛宮君と金髪少女を見ても、全く同じ反応でした。……酷くね？
よほど驚いたのか、ランサーは槍を全く抜こうとしない。なので、後ろに下がって自分から抜く事にした。

「イダッ！　イダダダダッ！！　アァァッダダダッダダダダダダダダダァァァァァァァ！！！！　…ゴホッ、オボォッ！！」

痛い思いをして抜けたと思ったら、今度は吐血。
本来なら抜いた途端に再生を初める筈なのに、中々再生しようとしない。さすがゲイ・ボルグ。もう二度とあんなもん食らうか。

「だ、大丈夫なのか？」

「マスター！　無暗に近づいては危険です！」

衛宮君、心配してくれてありがとう。そして金髪少女、テメェ後で話があるから体育館裏に来いや。

「ランサー、これで分かったろ？　お前は俺に殺される為に生かされてるんだって事がさ」

「分からねぇ……と、言いたい所だが、どうやら俺の完敗みたいだな」

槍を払って血を落とし、目を閉じて苦笑いを浮かべるランサー。

「あり、案外素直だね。ここでゴネてくれた方が殺しがいがあって嬉しいんだけどなぁ～」

「そりゃ悪かったな。生憎、自分の非を認めねぇほど落ちぶれちゃいねぇよ」

「ふーん……」

あれ、何だか普通にイイ奴なんですけど。これって、もしかして仲間フラグ？
見た感じ強そうだし、兄貴系キャラだし、どうやらホモじゃなさそうだし……うん、仲間にしよう！

「ランサーだっけ？　俺の仲間にならない？」

こんな面白い奴を殺すのは勿体ないしな。ジャンプだったら、ここ

で殺すとか絶対に無い。

「いきなりだな、オイ。残念だがそうもいかねぇ。俺にもマスターがいるんでな」

「だったら、そのマスターをぶっ殺したら俺の仲間になってくれる？」

傷口に魔力を送り込み、再生しつつランサーに尋ねる。

「そうだな……。その時になったら考えるわ」

ランサーは俺に背を向け、衛宮家の外壁へと飛び移る。セイバーが追おうとしたが、再び衛宮君に止められた。

「ああ、考えといてくれ。言っとくけど、マジだからな！」

俺の声が聞こえたのか手を振って「おう」と言い、夜に溶けていった。

俺も傷の治療を終え、一つ伸びをしようと両手をグッと天に向かって上げる。

しかし、金髪少女が俺の首筋に不可視の何かを突き付けて来たので完全に伸びが出来なかった。

先ほどの戦闘を見て、金髪少女の武器が不可視である事は一目瞭然。

恐らく、得物は刀剣の類。彼女の格好を見るに、西洋剣って所だろう。
有名所で言えば、グラム、エクスカリバー、デュランダルの三つ。ダインスレフのような呪いの剣を持っていそうなイメージは感じられない。

「おいおい、一体何のマネだ？」

無抵抗をアピールする為、手に持つ刺身包丁を地面に落とす。しかし、金髪少女は警戒を緩めない。

「貴様は何者だ？」

「俺からしてみれば、いきなり土蔵から現れたお前の方が何者だ？って感じなんだが」

「質問しているのは貴様では無い、私だ」

首筋に少し刺さり、微量の血液が鎖骨を通って下へと流れていく。

「やめろセイバー！　そいつは俺の家の居候だ」

「マスター……ですが――わかりました」

衛宮君の懇願に金髪少女―セイバー―が折れた。でも、ずっとこっちを睨んでくるんですけど。何とかしてくんない、これ。
結局さ、俺が首筋を刺されたのって一体何だったの？　新手のイジメ？

「セイバーさん、だっけ？　俺の事なんかよりも、他にする事があるでしょうが」

土蔵の屋根を指差すと、セイバーと衛宮君もそれに釣られて屋根を見る。
その瞬間、それに気づいたセイバーが一秒と掛からず屋根の上にいる侵入者へ飛び掛かった。

「おお～、中々に見ものだねぇ～」

「そんな流暢に言ってる場合じゃないだろ！　やめろっ、セイバー！！」

「おいっ、やめ――――」

どうやら遅かったようだ。衛宮君の左手の甲にある紋様―令呪―が一つ消える。
それと同時に、交戦していたセイバーの動きも強制的にストップした。

「チッ、勿体ない使い方しやがって……このアホッ」
「うっ……でも仕方ないだろ、ああでもしなきゃ止まってくれそうに無かったし」
「止まらなくていいんだよ。聖杯戦争はそういうモンなんだから」
このお祭りは殺し合ってナンボだろうに。
「聖杯、戦争……？」
キョトンとした顔で呟く衛宮君。おいおい、まさか……
「お前、まさか何も知らないで召喚したのか？　あの可愛い女の子を？　……かぁ～～～～～っ、お前ってやつぁよぉ！！」
あんな主人に忠実で可愛いサーヴァントとか、衛宮君……お前はスゲェよ。ホント。
あ、屋根からセイバーが降りて来た。どうやらもう一人いるみたいだ。……うわぁ、見た事ある顔なんですけど。つーか、嫌な予感しかしねぇ。
「可愛いって……確かに可愛いけど、それよりも———って、遠坂！？」

「こんばんは衛宮君。それと――――居候君」

「含みのある言い方すんのやめてくんない？　俺はただの一般市民よ？」

それを聞いて身体を震わせる遠坂さん。なんだ、トイレか？

「ただの一般市民が心臓貫かれて生きてるはず無いでしょうがッ！！」

「ですよねー（笑）」

「（笑）じゃなーい！」

どうやら怒ってただけみたいだ。というか、遠坂さんってこんなキャラだったっけ？
もっと「うふふ、おはよう衛宮君」みたいなキャラだった気がするんだが。ほら、その証拠に衛宮君が引いてるぞ。

「と、とにかく立ち話もなんだし、家に入ろう」

なんて衛宮君が言い出した為、みんな家に入る事になった。
その際、玄関がブチ破られてるのをランサーの所為にしたのは言うまでもない。

あとがき

これからもっと厨二臭くなります。

6．本能ではなく、理性で殺すのです

居間に相対するようにして座る遠坂さんと衛宮君。衛宮君の隣にはセイバーが待機し、不可視だが恐らく遠坂さんの横にもサーヴァントが待機しているのだろう。
俺はそんな二人の上座に座り、さっき作ったインスタント焼きそばをズルズル啜ってます。何が言いたいのかというと、空気がすごい重いって事と焼きそばギガうまいって事。

「まさか衛宮君が魔術師だったなんてね」

「俺も遠坂が魔術師だなんて知らなかったよ」

ニヤッと笑う遠坂さん。それを見て苦笑する衛宮君。俺の焼きそばを羨ましそうに見るセイバー。……うん、ちょっぴりカオスだ。
俺は特に何も言いません。面倒なんで。

「で、一体貴方は何者なのかしら？」

とか思ってたら不意に話を振られました。
遠坂さん、その魔術師特有の推し量るような目を止めてください。
イラッとするんで。

「何者って言われても（ズルズル）衛宮家の居候としか言えないん

だけど（ズルズル）」

「そんなの見ればわかるわよ。私が聞きたいのは、魔術師としての貴方の正体」

「教える訳無いじゃん（ズルズル）バカなのぉ？　死ぬのぉ？（ズルズル）――ブハァッ！」

殴られた。俺吹っ飛んだ。焼きそばも一緒に吹っ飛んだ。焼きそばが顔に掛かった。熱かった。顔に掛かった焼きそばを食べた。美味かった。

「い、いきなり殴るとか酷くね？」

「ごめんなさい、あまりにもウザかったから」

満面の笑みで言うなよ。オネーサマと被るからマジやめてください。

「だいたいさ、魔術師の正体とか言われても色々あるじゃんかよ。名前とか得意な魔術とかさ」

頬を摩りながら座ってた場所に戻る。衛宮君はひたすら苦笑いしている。

「そういえばお互い自己紹介もしてなかったわね。私は遠坂凛。冬木のセカンドオーナをやってるわ」

「知ってると思うけど、俺は衛宮士郎」

「田中一郎で――グハァッ！？」

また殴られた。さっきの倍（当社比）吹っ飛んだ。さっきの倍（当社比）痛かった。

「ちょっ、おまっ、いきなり何すんのぉ！？」

「田中一郎なんてありがちな偽名使ってんじゃないわよっ！」

「謝れぇ！　全国の田中一郎さんに謝れぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

まぁ……偽名なんだけどね。

＊＊＊

「で、結局あんたの名前は何なのよ」

あの後、遠坂（こんな奴呼び捨てでいんじゃね？）にガンドをぶっ放された。５発くらいモロに食らったので身体がめっさ怠いです。ぶっちゃけもう寝たいです。

俺が撃たれている間、ずっと遠坂を止めようとしていた衛宮君はともかく茶を啜っていたセイバーって一体……あのさ、俺って一応衛宮君の友達だよ？　ちょっとぐらい助けようとか思わんのかッ！！てゆうかさ、一応遠坂と衛宮君って敵同士じゃん？　そんな奴の前でガンドを俺に使っちゃっていいの？　手の内晒しちゃっていいの？　……ああ、衛宮君だからいいのか。色々と抜けてるしね、彼。

「遠坂って時計塔知ってる、よね？」

いきなり呼び捨てにしたから遠坂は多少驚いたようだ。しかし、それほど気にせず遠坂は話を進めた。うーん、何かつまらん。

「当たり前じゃない」

うわぁ、言いたくねぇ……。絶対知ってるよオネーサマ達の時計塔半壊事件。

「衛宮君はこいつの名前知らないの？」

「えっ、田中一郎じゃないのか？」

衛宮君を信じられないモノを見る目で見つめる遠坂。
彼、すっごい純粋だからね。こっちも騙しがいがあって面白い。

「あんたまさか、それ本気で信じてたの？　どれだけお人好しなのよ……」

「衛宮君の人の良さは五大陸に響き渡るでぇ」

ワカメのパシリすら好んで引き受けますからね、このお人好しは。
お兄さんにはちょっと真似できないよ。

「って、そんな事はどうでもいいのよ。ねえ、名前くらいは教えてくれたっていいんじゃない？」

どうすっかなぁ……ま、名前だけならいいかぁ。

「白子(しらこ)だ」

「は？　しらこ？」

「白いに子供の子で白子」

男に『子』とか絶対間違ってるだろ。つーか何だよ『しらこ』って。名前付けたヤツ絶対悪ノリしただろ。

「白子――――どこかで……」

遠坂は手を顎に当てて何かを考え始めた。おいおい……名前だけでバレるとかないよな。

だが、俺の予想を裏切り数秒後、遠坂の顔から血の気が失せる。それを見て俺も変な汗が出た。

「もしかして、あんたの苗字って――――」

まるで幽霊でも見たかのような、衛宮君の時とは別の意味合いの信じられないモノを見る目でこちらを見て来る遠坂。

「蒼崎ですっ☆」

「そんな……何で蒼崎の狂人が冬木の聖杯戦争に参加してるのよ……」

俺のウザい言い方に突っ込む事無く、遠坂はｏｒｚ状態でブツブツと呟いている。
それより蒼崎の狂人って何？　俺のこと？　いやいやいやいやいや、俺はまだ全っっっっっっ然まともな方ですから。
語尾に☆とか付けてやっちまったなぁと思うけど、オネーサマ達に比べるとまだまともな方ですからッ！！

「遠坂の奴、一体どうしたんだ？」

「魔術師的な事を行ってもわからんと思うから簡単に言うと、魔●村の２週目に突入した時の『あの絶望』を遠坂は感じてるんじゃないかなぁ？」

あれは泣いた。夢オチとかねぇよ。つーかレッドアリーマー強すぎるんだよ。初めてやった時、最初のアイツで３時間ぐらい費やしたぞ。

「えーっと、良く分からないけど、とにかく絶望してる事はわかったよ」

ああ、そうだったね。衛宮君はゲームあんまりしないもんね。貴方には三次元で彼女候補がいるから二次元なんてクソくらえな人ですもんね。
チッ、クソッタレが。お前なんか女に抱かれて溺死してしまえ。ま…とうさん辺りに刺されて死んでしまえ。……本当にやりそうで怖いな。

「というか貴方、数年前に殺されたんじゃなかったの？」

ｏｒｚのまま此方に顔を向ける遠坂……何で半泣きなの？　え、なに、俺のせい？

「ああ。確かアレ以来、時計塔じゃ俺って死んだ事になってるんだっけ？」

昔、ちょっと時計塔でゴタゴタを起こして命を狙われる羽目になったので、適当に殺されておきました。
ええ、死体を持って帰られないよう自分の身体を木端微塵に吹っ飛ばして。
だってウザかったし。適当な所で死んだ事にしておいた方が色々と動きやすいしね。

「それじゃあ貴方、やっぱり――――」

「ああ、不老不死だけど？」

これが俺が魔法使いと呼ばれる所以。まぁ、表向きは死んでる事になってるのでそれを知ってるのはごく僅かだけど。

「……噂は本当だったって訳ね」

ようやく立ち直ったのか、遠坂は座りなおして俺を軽く睨みつけてくる。

「噂？」

「蒼崎の末子は死を忘れたらしい、って」

ナニそのくどい言い回し。普通に不死になったって言えよ。つーか誰が言ったんだよ。

「とにかく、俺は不老不死って事でオーケー？」

「あ、ああ」

衛宮君も分かってくれたみたいだし、俺はもう寝るとしよう。

「そんじゃ、年配は去るとしましょうか。後はお二人で自由にニャンニャンして下さいよ」

衛宮君達とは学校では同学年ですが、人生的な意味で言うとそこそこ先輩なんですよねぇ。

「ニャ、ニャンニャン？」

衛宮君が首を傾げた。どうやら意味が分かっていないらしい。遠坂も反応が無い辺り分かってないのだろう。チッ、つまらん。

「まっ、待ちなさいよ。貴方、聖杯戦争に参加してるんでしょう？」

少し腰を浮かせて部屋を出ようとする俺に遠坂は声を掛けて来る。
なんだ、心配とかしてくれてんのか？
もしかして、俺に脈アリ！？　……ないな、絶対ない。ぶっちゃけ遠坂って衛宮君の事好きっぽいし。何となくだけど。

「まぁね。サーヴァントには裏切られちゃったけど」

キャスターコロス。ランサーも……マスターに責任取らす。切腹と

かさせてやろう。
そしてランサーは俺の舎弟になるのだ。外見が兄貴っぽいから最初はパシリとかさせて調教しよう。

「だったら、教会に身を隠した方がいいんじゃない？」

「なんで？」

あれか、聖杯戦争で敗北した人は教会に行って神父なしシスターに慰めてもらおう的な事なのか？
あれ、と言う事はサーヴァントを失った魔術師は敗北……いや、それはないな。結局の所、聖杯を手に入れた奴が勝者だし。

「なんでって……まぁ、貴方の事だから大丈夫だとは思うけど」

「別に強制じゃないんだろ？　だったらいいじゃん。てゆうかさ、俺まだ諦めてないよ、優勝」

そう言うと、いきなり遠坂さんが立ち上がって俺に身構えて来た。
彼女の背後にいたサーヴァントも実体化して俺に殺気を向けている。
何でいきなり戦闘態勢？　セイバーさんも衛宮君庇って俺に殺気をぶつけて来ないで下さい。それと不可視の剣を仕舞いなさい。死なないけど斬られたら普通に痛いんだぞ。

「別にあんたらと戦うつもりは無いっすよ？　だから殺気をぶつけ

て来るのを止めて下さい」

「……アーチャー」

遠坂が呟くと、アーチャーと呼ばれた白髪のおにーさんは殺気を消して霊体へと戻った。

「ほら、セイバーも」

「ですがマスター、彼は危険です」

少なくとも室内でマスターの居候に容赦なく剣を向けて来る貴方よりはマシです。

もし、このまま衛宮君が止めないでセイバーに斬りかかられたら間違いなく居間は血みどろですな。衛宮君、ブタ箱行き乙。いや、この場合はセイバーがブタ箱行きか。

「いいからっ！」

「……わかりました」

渋々了承するセイバー。あれ、何かデジャヴを感じるぞ。

「それで、戦うつもりが無いってのはどういう事かしら？」

何事も無かったかの様に座りなおす遠坂に釣られ、衛宮君とセイバーも定位置に戻る。なんだろう、ちょっとイラッてした。

「俺には今ものすごーく殺したい奴が二人ほどいる。いや、正確には一人と一体かな？」

「……誰？」

冷静に話を進めようとする遠坂。物騒な事を俺が言い出して驚愕している衛宮君。やっぱり魔術師と一般人とじゃ反応が全然違うなぁ。

「キャスターのサーヴァントとランサーのマスター」

「どうして？」

「前者は俺を裏切って殺しやがったから。後者の方は最初はランサーを殺すつもりだったんだけど、予定が変わってマスターに責任を取らす事にした」

色々と考えたけど、やっぱりランサーは殺さない事にした。
確かに一度殺されはしたが、そんな事がどうでもよくなるくらいアイツはイイ奴だった。だから、例え仲間にならなくても殺さない。
こんな感情を持ったのは初めてだ。ポリシーを曲げるのも初めてだ。
あんな気持ちの良い奴と会ったのも初めてだ。冬木市に来て正解だ

ったな。

「そんな訳で、その二匹以外とは敵対するつもりは無いってワケ」

今のところは、だけど。

「それで、その二人を殺すために私達の力が必要って事？」

「はぁ？　勘違いすんなよ。アレは俺の得物だ。横取りしたらマジでぶっ殺すぞ」

何考えてんだこのアマ。いっそここで――――いやいや、落ち着け俺。殺気立っちゃ駄目だ。

俺の殺気に気圧されたのか遠坂は目を見開いたまま動かず、衛宮君も殺気に呑まれているで一言も喋らない。

再びサーヴァントに戦闘態勢を取られるのは面倒なので、漏れた殺気を瞬時に戻す。

「え～……まぁそんな訳で、横取りはやめて下さい。オーケー？」

「え、えぇ……」

遠坂さん、あから様に視線を逸らすの止めてくれません？　いや、確かに俺が悪かったけどさ……。

「俺が言いたかったのは不可侵同盟を結ぼうって事」

「お互い潰し合うのは止めましょうって事？」

「そゆこと」

出来れば俺もあの２匹に的を絞りたいしねぇ。横槍を入れられると萎えるタイプだから。

「……わかったわ。その同盟、乗る事にする。それで、衛宮君はどうするの？」

「俺も遠坂や田中、じゃなくて蒼崎だったな、と戦うのは出来れば避けたい。それに、セイバーには戦ってほしくないからな」

さすが正義の味方。「女の子は俺が守る！」ってか。でもね衛宮君、そこの女性は君の戦闘力を１００とすると５３万ある人だから。フ●ーザ並だから。

なので、衛宮君は少なくともヤ●チャを越えてク●リン並の強さを得てからそのセリフを言ってください。

でないと次からそのセリフを言った場合、語尾に（笑）をもれなく付けさせて頂きます。

セイバーは衛宮君の発言に不愉快そうに眉を顰めている。

「マスター、それは私に対する侮辱ですか？」
「いや、そんなつもりは……」
「私は騎士です。女だからと言って差別しないで頂きたい」

うわぁ、セイバー怒ってるねぇ。衛宮君がマスターじゃなかったら斬りかかってるよ、コレ。
あんまり揉められるのも面倒なんで、適当に終わらせるとしよう。

「そうだよ衛宮君。そのセリフは彼女に一撃入れられるようになってから言いなさいな」
「だけど――」
「だけどもへったくれもないッ！」

反論しようとする衛宮君の頭にチョップする。
正義の味方になるには苦難とか苦悩とか苦痛とか、そういった色んな苦いを越えないとなれんのだよ。

「……やっぱ納得出来ないか？」
「……」

衛宮君は俯き、黙ったまま両拳をきつく握りしめている。
そりゃそうだよな。一応魔術師だけど、魔術が使える以外はただの一般人だった訳だし。
いきなり居候が殺すとか言いだしたり、土蔵から出て来た少女が殺し合いを始めたりすりゃあ誰だってそうなるか。

「……とにかく、教会に行きましょう」

衛宮君の態度に呆れながら、立ち上がって遠坂は言う。

「なんで？」

「教会に聖杯戦争の監督者がいるのよ。個人的には会いたくない奴だけど、衛宮君がそんなじゃ仕方ないしね」

その後、俺は遠坂と衛宮君と共に教会へ行く事になった。
セイバーはなぜか霊体になれず、結局あの鎧の上から雨合羽を被る羽目になり、その姿を見て爆笑していた俺は思いっ切りぶん殴られた。痛かった。
どうやら、衛宮君も教会は苦手らしい。俺も嫌いじゃないが、特別好きでもない場所だ。特別用が無ければ決して行くような所じゃない。

「そういや衛宮君、俺の事を蒼崎って呼んでたよね？」

「ん、ああ。それがどうかしたか？」

橋を渡っている途中、ふと思い出したので一応釘を差しておく。

「これから俺を呼ぶ時は田中か一郎って呼んでくれな」

「――ああ、分かった」

何となしに呼ばれたくない理由を察したのか、衛宮君は軽く頷きながら了承した。

あとがき

改めて読み直し、自分の厨二っぷりに悶えた。でも俺は書くのを止めないッ！

7．放置プレイって酷くね？

「喜べ少年、君の願いはようやく叶う」

悦に浸ったような面持ちで、教会を去ろうとする衛宮君の背にそう言葉を投げかける男。
彼の名は言峰埼礼。他人（ひと）の不幸は蜜の味な、性格ドグサレ外道神父その人である。

衛宮君は教会で言峰と話し、どうやら決意を固めたようだ。令呪を破棄せず、戦うと宣言したのだから。
遠坂と衛宮君が言峰と色々話している間、暇なので俺は長椅子に寝転んでボーっと天上を眺めていた。
そして話が終わり、俺達が出ようとした時に言われたセリフがアレだ。

衛宮君は不愉快そうに顔を顰めながら、振り向かず教会の扉を開いて出て行く。それに続き、遠坂も言峰を一瞥して出て言った。

「さて、君も行かないのかね――蒼崎白子」

「なんだ、やっぱり気付いてたのかい。まぁそれはそれとして、フルネームで呼ぶの止めろ。かなりウザイから」

「そうか、それは済まなかったな蒼崎白子」

この野郎……。

「はぁ……で、監督者的には俺が参加するのはオッケーなわけ？俺って時計塔じゃあ死んでる事になってるしさ」

「別に構わんさ。私は神父だ、来る者は拒まない」

よく言う。神より悪魔の方が万倍似合う性格しやがってからに。

「そうかい。じゃあ俺もそろそろ行くとしましょうかね。ああ、最後に一つ」

「なんだ？」

「喜べ神父。お前の願いはようやく叶う」

「……ククク、そうだな」

到底神父とは思えない邪悪な嗤い声を上げ、可笑しそうに顔を歪める。

俺もそれに釣られ、ニヤッと嫌な笑みを浮かべてしまう。

「それでは神父様、機会があればまた会いましょう」

恭しく礼をして、俺は教会を後にした。後ろで静かに嗤っている神父は無視します。不気味なんで。

教会の外に出ると、誰もいませんでした。どうやら衛宮君達は俺を放って帰ったみたいです。……泣いていい？

＊　＊　＊

「……どういうことなのぉ？」

俺を置いて先に行っていた衛宮君達に追いつくと、幼女と半裸のガチムチ男に絡まれていました。うん、良い具合にカオスだ。

「しらっ、じゃなかった一郎！？」

「久し振りぃ衛宮君。で、ちょっとお兄さん話があるんだけど？」

衛宮君に早歩きで迫り、胸倉を掴んで彼の背中を壁にぶつける。そしてイイ笑顔で衛宮君を見つめ、一切笑っていない眼光で彼を睨みつける。

「どういう事だテメェ？　なに先に帰っちゃってんのぉ？」

「おっ、落ち着け一郎っ。これには訳が――――」

「言い訳してんじゃねぇよ」

早口で捲し立てながら喋った衛宮君の胸倉を乱暴に放し、彼の頭に思いっきりチョップする。

次に遠坂を制裁する為、アーチャーの背後に守られている彼女へと歩みを進める。しかし、アーチャーが手に持つ剣を俺に突き付けて退こうとしない。

「退けや」

脅しの意味を込めて殺気をアーチャーに向ける。だが、アーチャーは全く堪えていないようだ。さすがサーヴァント、さすが英霊。

「悪いが、リンを守るのが私の役目なのでな」

苦笑しながらもその目は結構マジなアーチャーさん。……萎えた。冗談を本気交じりに返されるとねぇ……。

「……そんなマジになるなよなぁ。てゆうかさ、なんで俺が悪いみたいになってんの!? 放って帰ったのそっちじゃん!!」

セイバーとアーチャーからは警戒され、衛宮君と遠坂からは何もそこまで怒らなくても的な批判交じりの視線が向けられる。え、なに、俺が悪かったの？ でも無視されて置いてかれたの俺だよ？

「ちょっと！ 私を無視しないでよ！」

幼女が何か喚いている。はっきり言って、ウザイ。凄く可愛いんだ

けど、ごめんなさい今は普通にウザイです。

「ごめん、今取り込み中だから黙ってくんない？」

「――ッ！　バーサーカー！！」

遠坂め、絶対にいつか復讐してやる……。放置プレイで味わった俺の寂しさをいずれ――――え？

不意に頭上を見上げる。そこには無骨で巨大な塊があった。俺に迫りくるソレをただじっと眺め、どうする事も出来ないまま俺はソレに潰された。

グチョリと言うグロテスクな効果音は、次の瞬間巻き起こったコンクリートが破壊される轟音によって掻き消される。

バラバラですらない、グチャグチャになった俺の身体。五感の全てが崩壊し、ただ全身が引き裂かれたかのような激痛に見舞われる。常人ならば、その痛さに発狂してしまうだろう。しかし何度もこの痛みを体験している俺からすれば、小指を箪笥にぶつけるレベルとなんら変わらない。

これほどグチャグチャになっても意識があるというは不思議なもので、実際、こんなに身体を損傷しても意識があったのは両手で数えれるくらいしかない。

非常にレアな体験だが、ぶっちゃけ全然嬉しくない。だって痛いだけだし。これで隠されたパワーが目覚めて超野菜人になったりとかしないし。

まずは気付かれないように、ゆっくりと眼球を一つだけ再生させる。

そして周囲を見回すと、バーサーカーとセイバーが闘っていた。
現時点では7：3でバーサーカーが圧倒的に有利に見える。しかし、セイバーもそれが解らない訳ではない。
真正面からは勝てないと悟り、自身に有利な地形へとバーサーカーを誘導していく。マスター達も二体のサーヴァントの後を追い、この場から走り去っていく。
途中、俺のグロテスクな死体を見て完全に意気消沈している衛宮君を遠坂が平手打ちで喝を入れるイベントがあった。
遠坂が何かを話し、それを聞いて衛宮君は徐々に元気を取り戻す。
恐らく俺は不死身だから大丈夫だとでも言ったのだろう。
さすがにこれ以上心配掛けるのも癪なので、魔力を一気にグチャグチャになった全身へと流しこみ、数秒程で完全再生させる。

「あー、酷い目に会った……」

「ほら、言った通りでしょ。さぁ、早くセイバー達を追いましょう！」

「あっ、ああ」

得意げに言う遠坂に苦笑しながら、衛宮君は心配そうに俺の身体を見る。

「……一郎、本当に大丈夫なんだよな」

「大丈夫だって。それよりも遠坂が言うように、セイバー達を見に行った方がいいんじゃない？　彼女、あのまま放っておいたら確実に負けるよ？」

「――ッ！セイバー！」

聖杯戦争で敗北は死を意味する。サーヴァントは元から死んでいるから別にいんじゃね？　とか、そういう当たり前の事は衛宮君には通用しない。
彼から見ればセイバーは、自分の為に戦って殺されようとしている可愛らしい少女にしか見えないのだろう。さすが正義の味方。俺には到底マネ出来ません。
急に駆け出した衛宮君を遠坂と俺は追う。そしてセイバー達の元に辿り着くと、そこでは先ほどまでの劣勢が考えられないほど拮抗した勝負が繰り広げられていた。

「……いや、違うか」

五分五分に見えた戦いも、その実やはりバーサーカーの圧倒的有利。攻撃手段の乏しいセイバーは地の利を生かしてバーサーカーの攻撃を躱し続け、隙を見て攻撃するヒットアンドアウェイ戦法。
しかしバーサーカーに未だ隙は無く、放たれる攻撃の一つ一つが必殺という規格外の斬撃をセイバーは避け、受け流し、防いでいく。
だが、仮にバーサーカーに隙が出来たとしても、セイバーの一撃で奴が沈むとは思えない。
見ているだけでもわかるのだ。恐らく相対しているセイバーなら俺以上に分かっているはず。アレは攻撃だけではなく、防御も素早さも、全てが規格外なのだと。

「遠坂、アーチャーは？」

辺りを見回しても何処にもいないアーチャーの行方を遠坂に尋ねた。
遠坂は前方で行われている戦闘から目を離さず、俺に答える。

「セイバーを援護する為の準備に向かったわ」

「……遠距離射撃か」

遠坂は静かに頷いた。
アーチャーの援護があれば何とかなるかもしれない。だが、その前にセイバーが殺られれば――――

「――そういや、あの幼女はどこいった」

セイバー達を挟んだ向こう側、そこを目を凝らして見る。

「見つけた」

俺は瞬時に両手足を強化し、ゆっくりと数百メートル先にいるバーサーカーのマスターへと向かって行く。

「おい一郎っ、あまり前に出ると危険だぞ！」

「大丈夫だ、俺は死なない」

俺の肩を掴んで止ようとする衛宮君を払いのけ、意識をヤツだけに絞っていく。

世界が白くなる。この世界に俺と奴しか存在していないかのような感覚。

先ほどまで耳を劈くほどの爆音を鳴らしていたセイバーとバーサーカーの戦闘すら見えなり、聞こえなくなる。

俺と同じ白髪紅眼で、しかしアルビノの俺とは違う雪のように白く綺麗な肌を持つ少女。バーサーカーのマスターである少女。俺を殺した少女。

許さない。許せない。許したくない。殺したい。殺さないと。殺そう。殺す。絶対殺す。必ず殺す。間違いなく殺す。

バーサーカーによって築かれた瓦礫を強く踏みしめる。そして、一気に前方へ跳び込んだ――――！！

驚愕するセイバーも、いきなり介入してきた俺に動揺せず手に持つ凶器を振るって来るバーサーカーも、今の俺には全く見えない。

眼球を強化し、少女の顔を真っ直ぐに見詰める。驚愕と同時に嘲笑、そしてまた驚愕。

なぜ生きている。確かに奴は殺したはず――――今まで俺を殺した奴らと同じ反応をする少女に、俺は思わず顔を歪めた。

誰がどう見ても笑みにしか見えないソレは、しかし誰がどう見ても笑みには見えない。まるで顔面に亀裂が入ったかのような。

言うなれば狂笑。悪魔の嗤い。死神の微笑み。人間が最も恐れる死の恐怖が具現化した代物。

「■■■■■■■■■■■――――ッ！！！！」

右腕が宙に舞っていた。どうやらバーサーカーが俺を攻撃したらしい。その反動で俺は彼方へと吹っ飛ばされる。だが、そんな事関係ない。

上空より落ちて来た右腕を掴む。それを無理やり肩に押し当て、一瞬の内に再生して見せる。

立ち上がり、再び少女を見つめる。バーサーカーなどどうでもいい。そんなのよりも、俺はあのクソガキを殺したくて堪らないのだ。

「そんな……明らかに致命傷だったじゃない……」

少女の顔に明らかに見て取れる動揺。そして恐怖。ああ、早くその顔面を恐怖一色に染めて――――グチャグチャに潰してやりたい。

「Ｉ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｆｅａｒ　ｄｅａｔｈ！！　アーッハハハハハハハハハハ――――！！！」

「ッ、バーサーカー！　アイツを止めなさい！！」

「■■■■■■■――――――ッ！！」

迫りくる巨体。呆然とするセイバー。嗤い続ける俺。その時だった。

目の端に映った赤い閃光。眼球を強化していなかったら、絶対に見つける事など出来なかっただろう。

「衛宮ァァァァァ！！　セイバーを連れて離れろォォォォ！！！」

「どうしたんだ！？」

「いいから早くしろォ！！」

俺の焦りに気づいたのか、衛宮はセイバーの元に駆けて行き彼女の手を掴む。そして去ろうとした瞬間――――ッ！！

バーサーカーに向かって放たれた一本の矢――否、螺旋剣。それが奴に突き刺さったと同時、俺の視界は真っ白になった。

「――――――――ッ！！！！！」

自身の声すらも聞こえない状態で絶叫する。それは悲鳴では無く、剣を放った射手に対する怨恨の念。

意識すら途切れそうになったが、根性論で何とかそれは取り留めた。数秒掛けて身体を再生し、完全に再生できていない状態のままフラフラとした足取りで小高い丘を睨みつけた。

「あんの野郎オオ――――――――！！！！！」

大地を揺るがす絶叫を、一言一句違わず口にする。やがて丘から降りて来た奴は、俺を見るとフッと挑発的な笑みを浮かべた。

「どうゆうつもりだテメェ……」

「貴様は不老不死だろう。ならば木端微塵に吹き飛ばそうが、敵と共に爆発に巻き込まれようが構わないではないか」

ニヤリと笑うアーチャーに俺の怒りは限界まで膨れ上がる。思わず俺が殴ろうと手を振り上げたその時、衛宮がセイバーに肩を貸されてやって来た。

「……セイバーがいた」

衛宮は静かに口にする。隣にいたセイバーも、無言でアーチャーを睨みつけている。

「何？」

「あそこにはセイバーがいたって言ってんだよ！！」

俺と同じで相当頭にきているのか、眼を見開き、肩を震わせ、アーチャーに向けて怒声を張り上げた。しかし、それをアーチャーは一

笑する。

「ならば好都合だったな」

「なん、だと……」

「好都合だと言ったのだ。貴様も教会で言われただろう。聖杯戦争の勝者は一人だけだと。ならば最良のサーヴァントであるセイバーは、ここで脱落させた方が得策だ。そんな事もわからんか、貴様は」

「このやろ――ッつぅ……」

アーチャーに殴りかかろうとした衛宮だったが、不意に痛がりだして倒れそうになる。それをセイバーが阻止し、再び衛宮の腕を自身の肩に回した。
衛宮の背中を見ると、先ほどの爆発のせいで背中は酷く焼け爛れていた。焼けた服は皮膚にこびり付き、見ているだけで顔を顰めたくなる。

「はぁ……何か怒る気も失せちまった。よくよく考えれば、俺についてはアーチャーが正しいしからな」

殺されたのは釈然としないが、不死者と知っている以上、それは俺を信用してバーサーカーを殺したと言う事だ。
後で俺は再生するから道連れも一つの策と取ったのだろう。悔しいけど、反論できない。

「それで、バーサーカーはどうなったんだ？」

「残念だけどまだ生きてるわ。それも、ほぼ無傷のまま」

瓦礫に埋もれた地面を歩きながら此方に向かって来る遠坂の一言に、俺は思わず耳を疑った。

「はぁ？　いくらバーサーカーの防御力が高いって言っても、ほぼ無傷ってのは有り得ないだろ」

「とにかく、ずっと此処にいる訳にもいかないから一度衛宮君の家に戻りましょうか。それでいい？」

「あ、あぁ。いい、ぞ……」

衛宮の首がガクンと下がる。どうやら気を失ったらしい。

「セイバー、悪いが衛宮をお願いできるか？」

「はい、シロウは私が引き受けましょう」

「ありがとう」

「……いえ、これが私の役目ですから」

珍しいものを見る目で俺の顔を見つめると、少し微笑んで答えた。
少しは距離が縮まるといいんだが。さすがに警戒されっ放しだと怠いんでねぇ。

その後、アーチャーとのゴタゴタを遠坂に話し、アーチャーは彼女に教育的指導を受けた。ざまぁｗｗｗ
衛宮家に帰宅した時には衛宮の傷が塞がっていて驚き、遠坂が何やらブツブツ呟いていたのが不気味だった。
バーサーカーやそのマスターの話は、衛宮が起きてから話す事にする。

あとがき
理性の無いバーサーカーはイリヤの命令で動きます。
なので、バーサーカーが殺した＝イリヤが殺したとなります。

8．ヘラクレスってカブトムシみたいだね

日の出を迎えた早朝、チュンチュンと啼く小鳥の囀りを聞いて呆けていたら、ようやく衛宮君が起きてきた。
遠坂が衛宮君にあれこれ聞いているのだが、衛宮君は首を捻るばかりでまったく理解できていないようだ。
一体遠坂が何を聞いているのかと言うと、衛宮君の自己再生能力についてだ。
最初はセイバーの能力かと睨んでいた遠坂だったが、セイバーに違うと一刀両断された。かといって、衛宮君はあの様子だから身に覚えは無いと見ていい。

「ま、別にいいんじゃないの、放っておいても。　死ぬとかならともかく、むしろ自己治癒してくれるんなら好都合じゃん」

自室から取ってきた煙草に火を点け、煙を灰に入れた後、深く息を吐き出す。

「……それもそうね。当の本人が全く分かってないんじゃ、手の打ちようもないし」

遠坂も呆れ混じりそう言い、居間のテーブルを挟んで俺の対面に座る。
その後、衛宮君は俺達の上座に座り、セイバーは衛宮君の左斜め後ろに座る形となった。

「さてと、衛宮君も起きた事だし、そろそろ本題に入りましょうか」
「ああ。で、早速で悪いんだが――」
「バーサーカー、でしょ？」
「――ああ」
予想していたように言う遠坂に、俺は静かに相槌を打つ。
居間の空気が張り詰める。所謂シリアスという奴だろう。
「バーサーカー。真名はヘラクレス。あのサーヴァントの持つ宝具は『十二の試練』と言って、なんでも１２回殺さないと死なないらしいわ」
「１２回ねぇ……」
意外と少ないんだな。これなら余裕で倒せそう……でもないか。あの身体に傷を付けるのはちょっと難しそうだし。
「それに、Ａクラス以上の攻撃でなければヘラクレスにダメージすら与えられないみたいよ。しかも、ヘラクレスは一度受けた攻撃は次から効かなくなるらしいわ」

「うへぇ……」

まさに最強だな。そいつを殺すのは俺だけだと無理っぽいねぇ。いや、あのガキを集中的に狙えば何とかなるか……？

「というか遠坂、何でそんなに詳しい情報を知ってんだ？」

「バーサーカーのマスターが言ってたからよ」

「はぁ？」

サーヴァントの真名や宝具を敵にバラすとか馬鹿なのか、そいつ。それとも余裕を見せてるのか……いずれにせよ、ラッキーな事に変わりは無い。

「あのガキの名前とかわかるのか？」

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。貴方も魔術師なら聞いた事くらいあるでしょう？」

「ああ、あれね」

接点は全く無いが、噂くらいは聞いて事がある。確かホムンクルスを作ってる家系だったか。

確か聖杯戦争の立案者のユスティーツァなんたらかんたらが大聖杯

の礎になったんだっけ……まぁ、そんな事どーでもいいんだけど。

「それで、これからどうするんだ？」

一応、遠坂と衛宮君と俺は不可侵同盟を結んでいる。だが、バーサーカーと言う強敵が出現した以上、この際本当の意味での同盟を結んだ方が良いのかもしれない。
俺はどちらでもいいが、衛宮君の事を考えるとそうも言っていられない。俺もセイバーも四六時中彼を見張っていられる訳じゃないのだから。
ぶっちゃけると彼が死んだら俺が色々と困るのだ、生活的な意味で。特に食事面が。衛宮君の料理は一度食べたら病みつきになる。

「そうね……一晩、考えさせてもらっていいかしら？」

遠坂はこう言ったが、恐らく同盟は結んでくれるだろう。態度にはあまり見せないものの、彼女は俺の存在をかなり意識している。それもそのはず。俺は槍で心臓を刺されようと、身体をグチャグチャに潰されようと、決して死なない不死の人間――魔法使いなのだから。

仮に同盟を破棄され、戦闘になったとしても遠坂もといアーチャーとの相性は恐らく良いと思う。と言うより、基本的に直死の魔眼保有者を除けば俺を殺せる奴なんて存在しない。
だからこそ、彼らがどんな手を使ってこようと怖くない。こちらは１０００度殺されても死ねないのだ。俺は数千、数万殺される内に

たった1度殺せばいいだけ。
これは最早チート、イカサマの類。ただの出来レース、茶番劇だ。
完全武装した軍人と素手の子供を戦わせるようなモノ。結果は目に見えずともわかる。
だからこそ、聡明な遠坂は俺と敵対するような選択肢は選ばない。
絶対に。

だがもし、仮にもし遠坂が封印系統の結界を行使できるとしたら話は変わる。
遠坂とアーチャーのコンビとの相性は最悪のものとなる。
アーチャーの爆撃とも言える射撃で俺の身体を粉砕し、俺が完全に再生し終わるまでに遠坂が俺を封印する結界を張れば良い。
俺は蘇る事は出来ても、封印を防ぐ事は出来ないのだ。

「オーケー、わかったよ。衛宮君もそれでいいか？」

「あ、ああ」

まだ慣れてないみたいだな。衛宮君って駆け引きとか苦手そうだし、ある意味一番魔術師から遠い人柄なのかもしれない。

結局、その後遠坂はすぐに衛宮家を後にした。
どうやらその時に衛宮君とアーチャーとの間に少し確執があったらしいんだけど、見送らずに自室へ戻った俺には全く関係ありません。
つーかヤロー同士の事なんかに興味ありません。勝手にやってて下さい。貴方達がホモろうがゲイろうが私には一切関係ありません。

＊　＊　＊

――――早朝の道場にて……

たまたま朝起きて道場に来てみると、セイバーと衛宮君がいました。
トイレで起きたついでに見に来たので、すぐに寝に帰ります。まだ
２時間も寝てないんだよねぇ。
じゃ、お二人さん。おやすみ～。

数分後……

「……いや、何この状況？」

竹刀を持って俺と対峙するセイバー。苦笑しながら手を合わせ、申し訳なさそうに俺へ礼をして来る衛宮君。そんな彼に竹刀を持たされる俺。……うん、カオスだ。

「ごめん一郎。セイバーがどうしてもって言って聞かないんだ」

「……（ーωー）」

フザケンナッ！　こちとら朝っぱらに無理やり起こされて身体がまだ寝てんだよ！　令呪でも何でもいいから使ってセイバー止めろ衛宮君！
あれだよ？　こんな状態でセイバーとやったらお兄さん死んじゃうよ？　いいの？　１１０番するよ？　聖杯戦争じゃなくて逆転●判が始まっちゃうよ？
何て事を考えていたら、とうとうセイバーが正眼に竹刀を構え出し

た。

「お願いしますイチロー。私と戦ってもらえませんか？」

ここでノーって言っても「問答無用！」とか何とか言って打ち込んでくるんだろうなぁ……もうヤダ。
何でクソ眠たい朝っぱらからこんな事を……。

「というかセイバー。イチロー言うの止めろ」

「なぜです？」

「某日本メジャーリーガーと被るんだよ。だからセイバーは……うん、ハクって読んで」

白の音読みから取りました。イチローって呼ばれると、何か名前負けしてる気がするんだよな……。
ちなみに、オネーサマは俺の事をシロと呼びます。「シロ、ちょっと飲み物買って来い」みたいな。パシリです。ええ、パシリですとも。

「はぁ……分かりました」

セイバーは俺の頼みを不思議に思いながらも了承してくれた。

「それじゃ、時間もあまり無いから一本勝負な？」

「はい」

「オッケー」

衛宮君の決めたルールを了承し、俺も正眼に構えてセイバーを見据える。

ぶっちゃけた話、俺は剣道なんてやった事がない。
しかし、そう言った類の参考書や漫画は読んだことがあるので、形だけは堂に入っていると思う。
自慢話になるけど、こう見えても俺はこと戦闘や殺しに関して非凡な才能を持っている。これだけは姉二人にも絶対に負けない。
しかも、漫画などで描かれている技能を視ただけでラーニング出来る。よほど難しいモノやその人限定のモノは不可能だが、ある程度のレベルまでなら一目で『覚える』事が可能だ。
とは言っても本当に『覚える』だけで、やはり最初から完全に使いこなす事は無理だ。何日も、何週間も、何ヶ月も、何年も掛けてようやく正真正銘自分の技能となる。

だからこそ、今の内にセイバーの剣技を視ておくのも悪くない。
あれほどの腕を模倣するのには向こう何年も掛かりそうだが、それでも十分にお釣りがくる。
最も、アレが『覚える』ことすら困難なモノだとしたら時間の無駄になってしまうが。

「――始めっ！」

「はぁっ！」

衛宮君の掛け声とともにセイバーは床を蹴り、俺へと踏み込んだ。
数メートルはあった距離を一瞬でゼロにしようとしたセイバーだったが、俺はそれを後方に跳ぶことで回避する。
先ほど俺の居た場所にセイバーの竹刀が袈裟に振り下ろされた。

ブォンッ！！――――いや、これ剣道じゃなくね？　普通さ、剣道でそんな野球の素振りみたいな音出ないよね？　アレ、真面に食らったら間違いなく骨折れるよ？

などと言う俺の想いを衛宮君は察してくれたのか、唖然とした表情でセイバーを見つめている。
確かに戦闘で彼女の凄さを垣間見たのだろうが、まさか本気（ガチ）で殺り合う（誤字に非ず）とは思っていなかったのだろう。

「あの、セイバーさん、もう少し手加減をしてくれないとお兄さん怪我しちゃうんだけど？」

「鍛錬に怪我は付き物です」

再び正眼へ戻し、徐々に俺との距離を詰めるセイバー。顔が真剣（マジ）な

だけにタチが悪い。

「鍛練って何！？　寝起きの人に一体何しようって言うの！？」

「鍛練です」

「いやっ、そういうことじゃなくてぇっ！？」

俺の言葉を黙殺してセイバーは竹刀を振り降ろしてくる。先ほどの一撃と違い、僅かに隙が出来ている。
面を狙った攻撃を竹刀で受け流しながら左へ身体をずらし、流れるようにセイバーの胴へ攻撃を――――否、再び後ろへ跳び退いた。

「……わざとか？」

セイバーは答えない。

セイバーが俺へと一撃を放つ時に出来た隙。あれは俺を誘い込むための罠。
もしあのまま反撃していれば、今頃俺は彼女の一撃を食らって悶絶していただろう。

「何も本気でやらなくたっていいんじゃない？」

「世迷い言を。先ほどのアレが本気だと思っているのなら、今すぐ

その考えを訂正した方が良い」

得意げにニヤリと笑ってみせるセイバー。

「……（#＾ω＾）ビキビキ」

言ったなこのアマ……そんなら否が応でも本気を出させてやらぁ――

俺は正眼の構えを解き、セイバーを中心にゆっくりと円を描くようにして歩く。

そして徐々に歩く速度に緩急を付けていき、無数の残像を発生させる。

「なんだ……一郎が、沢山いるように見える……」

驚愕に目を見開いている衛宮君が呟く。恐らく、今彼らには俺が分身しているように見えるだろう。

「いえ、これは――――」

俺の技にも動揺せず、セイバーは構えを崩す事無く目で俺を探っている。

こちらから攻撃しなければ絶対に気づかれないだろうが、もし攻撃すれば彼女なら気づくだろう。
微かに感じた気配や動作を彼女が見逃すはずがない。なぜなら、彼女はセイバーだから。

「そう、暗殺術の一つさ。これって結構難しいんだよね」

暗歩という無音歩行術を応用した高等な技であり、これをマスターするのに半年も掛かった。それだけに、この技能はかなり役立っている。
大抵の奴はこれをやると動揺するので、容易く殺る事が出来る。しかし、目の前の少女は全く動じない。さて、どうしたものか……

「――――ん？」

不意にセイバーが目を瞑った。いわゆる心眼という奴だろう。
心の眼を開き、俺の気配を察知する。なまじ英霊なだけに、マジでやりそうだから怖い。

数秒後――――

「そこかっ！」

「マジでやってきたんですけどぉ！！」

セイバーの突きを前方へ転がる事でギリギリ回避し、次の瞬間には片膝を付く体勢でセイバーの膝に横薙ぎの一撃を放つ。
しかしソレは後ろに下がる事で躱される。だが俺はその時に出来た1秒にも満たぬ時間で立ち上がり、下がった事で構えの崩れているセイバーへと打ち込む。

ミシミシと竹刀の撓る音が聞こえるが、俺もセイバーも一切引き下がろうとしない。しかし、彼女より力の劣る俺はやがて徐々にだが押され始める。だが、それこそが俺の狙い。
俺は合気道の応用でセイバーの力を旋転する事により受け流そうとした。しかし、同様の事をセイバーも考えていたのだろう。
パシン、という竹刀の小気味よい音と同時に俺とセイバーは回転する。俺は回転によって出来た力を竹刀に込め、セイバーの胴目掛けて振り切った。だが――

「なにっ！？」

「まだまだ読みが甘いですね――」

俺の一撃をセイバーは完全に読み切り、絶妙なタイミングで俺の竹刀を防いだ。
そして俺の力が竹刀へ込められている内に、力の流れに沿って竹刀を床へ叩き落とす。そして――

「ハッ！」

「ぐへぇ！」

勢いよく俺へと一歩踏み込み、俺の腹にドスンと重たい一撃を叩き込んでくれた。
おかげで俺は床へと蹲り、悶絶。バーサーカーにグチャっとやられたヤツの方が数百倍痛いが、それでもこの鈍痛に慣れる訳では無い。どれだけ痛みに慣れようとも、痛い物は痛いのだ。その辺は考慮してほしい。

「一本！　セイバーの勝ち！」

「――ですが、悪くはありませんでした」

「……そうですかい」

剣の英霊に「悪くない」と言われるのは存外嬉しかったりするのだが、如何せんそれの外見が少女となると妙な気分だ。
嬉しさよりも悔しさを半端無く感じてしまう。……俺も衛宮君の事言えないなぁ。

竹刀を拾い、セイバーに手を貸してもらって立ち上がる。

「一郎、大丈夫か？　かなりヤバそうな音がしたんだが……」

「俺はだいじょーぶ。それよりも、セイバーに手加減という物を教えてあげたほうがいいんじゃない？　どうせ衛宮君、彼女に鍛練し

てもらおうって思ってたんだろ？」

「えっ、あ……まぁ」

動揺する衛宮君を見て、俺は面倒臭そうに欠伸をする。
ふと前を見ると、セイバーは少し驚いた面持ちで衛宮君を見つめていた。

「ま、それはともかく、そろそろまっさんが来る頃だったんじゃないか？」

「まっさん？　……あっ、桜のことか！」

考えること数秒、衛宮君は声を張って言う。それにしてもよく分かったな、オイ。
そう言えば、彼女の苗字なんだったっけ……まぁいいや、これからまっさんと呼ぼう。こっちの方が分かりやすいし。

「せんぱーい？　どこにいるんですかー？」

遠くでまっさんの声が聞こえる。恐らく玄関先で呼んでいるのだろう。

「ほら、衛宮君。愛しの後輩が呼んでるよ？」

「愛しっ！？　俺と桜はそんなんじゃなくて「早く言った方がいいんじゃない？」――っ、とにかく違うんだからな！」

ニヤニヤする俺を尻目に、顔を真っ赤にした衛宮君は急いで居間へと戻って行った。
俺は手を振って彼の背中を見送り終わると、再度セイバーへ振り返る。

「……セイバー」

俺の呟きに微かに首を傾げ、セイバーはこちらを向く。

「衛宮君の事、頼むな。アイツってよく無茶するからさ。だから、君が彼を護ってやってほしい」

セイバーの緑の瞳を真剣な顔で見つめ、そして頭を深く下げて頼む。
衛宮君の前なら恥ずかしくて出来ないので、彼のいない今がチャンスなのだ。
聖杯戦争に衛宮君が参加した以上、彼の命は俺一人だと護れない。
彼には出来れば生きていてほしい。衛宮君の作る飯は美味いし、何より彼が気に入ったから。
衛宮君がもう少し強ければ良かったのだが、如何せん強化しか出来ない半端者なので俺だけではどうしようもない。

「頼まれるまでもありません。私は彼の剣です。護る事は当然の義務だ」

予想通りの答えが返って来て、一先ずホッとする。

「そっか。ありがとう、セイバー」

「……」

俺の言葉にポカーンとしているセイバー。え、なに、俺なんか変な事言った？

「どうしたの？」

「……いえ、まさか貴方に礼を言われるとは思わなかったので」

「しっ、失礼な！　俺だって感謝した時は礼の一つくらい言うわい！！」

全く、セイバーは俺を何だと思ってるんだ。あれか、不死身だから肉壁にすればいいんじゃね？　とか思ってるのか。

あながち否定できんな……オネーサマという前例があるだけに。

その後、俺とセイバーは竹刀を片付け、俺は衛宮君が料理の支度を

しているであろう居間へと足を運んだ。
ちなみにセイバーは衛宮君の命令で別室で待機だそうです。命令と言っても、衛宮君の事だからお願いしたんだろうけど。
珍しく衛宮君らしくない事をするなぁと思いつつも、どうせ数日も経てば自ら彼女の存在をバラすだろうと一人笑いを噛み殺しつつ思った。

あとがき
未だかつてない厨ニをお送りいたしました。

Ｆａｔｅやり直すの怠かったので、アニメ版を見ております。
あれで大体は思い出せるかもしれないんで。
Ｆａｔｅ見終わったら次は空の境界か……展開を知ってるだけに読むのが辛い（´・ω・、）

今回用いた技能の元ネタはＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの『肢曲』でした。
恐らくこれからも様々な漫画の技が登場するかもしれません。ええ、チートですとも。

9．●●円（ご想像にお任せします）

昼休み――――俺は一人、屋上の日影で飯を食っていた。

今日の昼はコンビニで買った鮭と昆布のお握りだ。

鮭お握りを一口頬張り、同じくコンビニで買った５００ｍｌのペットボトル入りの茶のキャップを開けて飲む。

「……やっぱり衛宮君の方が美味いな」

などと一人呟きながら、再び鮭お握りを口に含んだ。

口内のご飯を嚥下しつつ、雲が斑にある空をサングラス越しに眺める。

今日はいい天気だ。それ故に、俺としては面倒な一日となる。

登校時には日傘を差し、サングラスを掛ける。最も、魔術的なモノで何とかなるのだが、冬場であればそれほど私生活に支障を来さないので一々魔術に頼る事は無い。

何と言うか、意地である。あの忌々しい太陽に負けてたまるかと言う、我ながら阿呆としか思えない意地である。だからこそ、負けられない。

と言いつつも、飽きたり面倒臭くなったら魔術を使ったりしてます。

怠いんで。

「曇れ、曇れ、曇れ、曇れ――――」

呪詛の如くひたすらに其の単語を口にする。
飽きる事なく繰り返される言葉は、現実をそちら側に歪めてしまう……らしい。良く分からんが、クロ……ギリ？　の妹が言っていた気がする。
という訳で、本当にそうなのか実践している最中です。

「曇れ曇れ曇れ曇れ曇れ曇れ曇れ曇れ曇れ曇れ曇れ曇れ――――」

俺の祈りならぬ呪いのような言霊は、どうやらあの忌々しい青空には毛先ほども効いていないようだ。
むしろ逆に雲は減っていき、やがて日向に降り注ぐ日差しは余計に強くなった。

「やっぱり嘘だったんじゃねぇかッ！！　つーか逆に晴れるってどういうことなの！？」

誰もいない屋上で声を張り上げ、お握りをヤケ食いして最後にお茶で流し込む。
そして「どっこらしょ」と気合を入れ、ゆっくりと立ち上がると緩慢な動作で頭を掻いた。

「午後の授業は……サボるか」

昼休み終了と同時に俺は保健室へと行き、何時も通りの手を使って早退した。
俺は一部を除き、学校では虚弱体質で通っている。その上、アルビノであるから必然的に教師達の俺への疑心は限りなくゼロに近いものとなっている。
だが妙な事に、生徒の間では変態だの狂人だの言われ、俺の病的なまでに白い肌や白髪が余計に噂を誇張させているようだ。
誰が変態だっ、全く。このクールでエキセントリックな俺に向かってそんな暴言を吐きやがるとは。
下駄箱で上履きを脱ぎ、靴に履き替えて外に出る。途中、日傘を差す事は無論忘れない。
公舎へ振り向く事なく、俺はグラウンドを踏み越えて校門をくぐった。そうして通学路を１０分ほど進んだときだった。

……ピリリリ――――不意に携帯が鳴った。

折り畳み式の携帯を開き、画面を見る。そこには電話番号と『オネーサマ』という単語が表記されていた。
俺は一縷の懸念を胸に抱き、即行で電源のボタンを押して切ろうと思ったが、そんな事をすれば私刑（リンチ）に遭うのは目に見えている。
なので俺は通話ボタンを押し、携帯を耳に当てる。心労から来る胃の痛みせいで、自然と眉間に皺が寄った。

「もしもし？」

出来る限り明るい声を出し、険しくなっているであろう表情を無理やり笑顔へと変える。
妙に顔の筋肉が引き攣っているように感じるのは、この際気のせいだと思う事にする。

≪どうだ、聖杯戦争とやらは？≫

喜々とした我が姉の声に溜め息を漏らして脱力しつつ、前々から言おうと思っていた事をぶちまけた。

「はっはっは、それはもうすっごく楽しいですよ。1日に4度も死ぬ羽目になるんですから。しかも、その1回はオネーサマの作為的なナニかを感じるんですが、それは俺の気のせいなんでしょうか？」

≪気のせいに決まっているだろう。この私がそんな事をするような人間に見えるか？≫

見えます。貴方を知ってる人達に聞けば全員が「見える」って答えます。

愉快そうに言うオネーサマに多少苛立ちつつも、今回に始まった事では無いので水に流す事にした。
最も、仮に俺がブチギレてもひらりと躱されるのがオチなのだが。
オネーサマは詐欺師のように口が上手い。特に相手の傷口を的確に抉るような発言をする才能は、恐らく世界中探しても右に出る者は

そういないだろう。

「……まぁ、俺の死亡談義は置いといて、要件は何ですか？」

≪別に要件なんてないさ。たまには姉弟で無駄話をするのも乙だろう？≫

「ごめんなさい、意味が分かりません」

オネーサマの考える事は昔からよく分からない。
一つ言える事は、裸眼時のオネーサマは限りなく底意地が悪いと言う事だけだ。

≪サーヴァントを召喚したんだろう？≫

結局それが聞きたかったのか。

「ええ。直後に裏切られて殺されましたけど」

刺々しく嫌味な言葉を返す俺がそんなに面白かったのか、オネーサマは電話越しでも分かる程に楽しげに笑っている。
かなりイラッて来たので、丁度近くにあった空き缶を思いきり前方へ蹴飛ばした。それに驚き、猫が慌てて逃げて行ったが気にしない。

≪それで、棄権したのか？≫

俺は「まさか」と鼻で笑い飛ばし、言葉を続ける。

「俺は俺を殺した存在を許さない。だから、ソレらを殺すまでは棄権なんて有り得ないよ。けど――」

一息置き、続けた。

「一人、いや一体と言うべきかな。許せる存在がいた」

≪ほぉ……誰だ？≫

驚嘆から微かに声を上げ、興味深げにオネーサマは訪ねて来る。
今まで俺は自分を殺した存在を許した事がない。それはつまり、俺を殺した存在は必ず殺し返したという事だ。
それは例え、オネーサマであろうとも変わらない。彼女と殺り合った時、俺が彼女に幾度も殺されたように、俺も彼女を幾度も殺し返している。
故に、オネーサマは気になったのだろう。俺が初めて殺意の矛を収めた相手が誰なのかが。

「ランサー。恐らく真名はクー・フーリン」

≪根拠は？≫

「彼はゲイ・ボルグを所有していました。それに、宝具としてそれを俺に使って来ましたし」

俺の返答を受け、オネーサマは思案しているのか携帯から一切の音が止む。

その間、俺は特に声も出さず衛宮宅を目指して黙々と通学路を歩いた。そこでふと、ある事を思い出す。

「あぁ、そうそう。ゲイ・ボルグの事なんですけど、アレ、たぶん因果の逆転ですよ」

≪ほう……確かに、かの魔槍ならば可能だろうな。最も、それはクー・フーリンが行使したからこそなのだろうが≫

それには同感だ。ゲイ・ボルグの力を最大限に発揮できるのはクー・フーリン以外に有り得ない。

「オネーサマも来ればよかったのに。色々とレアな体験が出来て暇つぶしには持って来いですよ？」

≪私は私で忙しいんだ≫

忙しい、ねぇ……。

あ、そういえばオネーサマに金貸してたんだった。
丁度良い機会だし話しつけとかないと、このままだったら踏み倒されかねない。

「それはそうと、オネーサマって俺から幾らか金借りてたよね？」

≪いや、借りてない≫

全否定したよ、オイ。マジな声で全否定したよこの人。

「いやいやいやいやっ、普通に借りたじゃないですか　●●円！（ご想像にお任せします）　一体いつになったら返してくれるんですか！！」

利息も付き、今では洒落にならん金額になっている。

≪いくら私でも、借りていない物を返す事は出来ないよ≫

寂しげな物言いするオネーサマ……俺をおちょくってやがるのか。

「惚けないで下さい！」

≪シロ、いくら金に困っているとはいえ実の姉から金を騙し取ろうとするとは……お前には失望したよ≫

オネーサマは悲痛かつ非難を浴びせるような言動を取る。少しトーンを落とす辺り、よほど熱入れて演じてやがる。

「失望したのはこっちだよ！　ちょっ、え、なに、何で俺が悪い感じになってんの！？」

≪それを言うなら、私もお前に貸しがあっただろうが≫

「え……何のです？」

思わぬ反撃に足を止め、目が点になった。

≪いつかお前と殺り合った際に私がどれだけ金と労力を費やしたと思う？≫

不機嫌さがこちらまで伝わってくる、オネーサマにしては珍しく気持ちの籠った口調。

あの時の事は思い出すのも嫌らしい。

「知らないですけど……」

≪そうだな、金額に直せば●●円だ≫

「――――」

『度肝を抜かれた』とは、今の俺の状態を言うのだろう。
オネーサマが俺にしている借金より、俺がオネーサマに与えた損失の方が大きかった。
それがどういう事かと言うと、つまりオネーサマはこう言いたいのだ。

『借金を帳消しにしろ』と。

≪はっはっは――まあそんな訳だ。それじゃ、せいぜい頑張りたまえ弟よ≫

俺が何も言わない事から意思が伝わったと確信したのだろう。
オネーサマは勝ち誇ったように笑い、別れの言葉を口にした。

「ちょっ――――」

――――ガチャ、ツーツー……

一方的に通話を切られ、虚しい気分になっていく。だが、それは数秒のこと。
次の瞬間には怒りによって全身を震わせ、偶然横にあった電柱を渾身の力でぶん殴った。

「コンッチクショーーーーーー！！」

鈍く、重い音が周囲に響き渡った。予想以上に破壊音が大きかったので、多少焦って辺りに人がいないか首を回して探してしまう。
強化すらしていない、正真正銘素手の拳にも拘らず、電柱には大きく亀裂が走っていた。
拳は赤く染まって血が滲み、電柱の殴った部分には微かに紅い液体が付着している。

「今なら神様だって殺せる気がする。オネーサマは……無理だけど」

そんなどうでも良い事を呟きつつ、誰かに見られのは不味いのですぐさま其処を後にした。

合鍵を使って玄関を開ける。
傘立てに日傘を置き、シンと静まり返る家に向かって言った。

「ただいま〜って、誰もいない……あ、セイバーがいるのか」

彼女の事だ。律儀に部屋で待機しているのだろう。
どうでも良い推論を考えつつ、居間に入って鞄をテーブルの上に投げ捨てる。
その場にドカリと座り、そのまま脱力するように背中を畳に預けた。
呆と天井を眺め、不意に鬱陶しくなったサングラスを外す。

「ふぁ〜、眠た……」

瞼が重い。視界が狭まる。どうやら俺は眠気に負けているらしい。
抵抗も虚しく、俺の視界は黒く塗りつぶされた。

起きると4時を回っていた。
目を擦り、上半身を起して大きく伸びをする。

「というかさ、こういう時って何か昔のトラウマ的な物を思い出して「……クッ、またあの時の夢か」とか言うモンなんじゃないの？」

ちなみに、タキワザさんは毎日そんな感じらしい。何でも、『真の邪気眼を保有している』そうだ。
中二の持つ邪気眼ではなく、本物の邪気眼ってどんなんだろう……
見てみたいけど、見たら色々とヤバイ気がしないでもない。

ガラガラ———玄関の開く音がした。たぶん衛宮君が帰って来たのだろう。
廊下を慌しく歩く音が聞こえ、やがて居間へ姿を現したのは予想通り衛宮君だった。

「お帰り、衛宮君。学校は楽しかった？」

俺の飄々とした態度に毒気を抜かれ、衛宮君は頭を垂れる。

「またサボったのか？」

「サボり違う、早退」

苦味を噛み潰したような顔でテーブルを挟んだ対面に座り、衛宮君は話を続けた。

「どっちでも良いけど、藤ねぇが怒ってたぞ。一郎のクラス、５時間目が英語だったろ？」

「……あ」

すっかり忘れてた。どうしよう……あの人には何でか知らんが仮病は通じんからなぁ～。

よし、開き直って「サボりましたが、何か？」的な感じで――――いったら間違いなく説教タイムだな。どうしよう……。

「それはそうと、セイバーは？」

衛宮君がセイバーが待機しているであろう部屋の方角を眺め、呟く。

「さぁ……たぶん彼女の事だから、今も待機してるんじゃないの？」

「そっか……」

数秒そちらをじっと眺めた後、衛宮君は立ち上がって居間を出て行く。恐らくセイバーの許へ向かったのだろう。

俺も冬木の虎さんをどうやって説得するか考えるため、一端自室へ戻る事にした。

あとがき

書き方が若干変わったかなぁと思う9話でした。読みにくかったらゴメンナサイ（ー ω ー；；）

空の境界『伽藍の洞』まで見直しました。アニメ版も『痛覚残留』まで見ました。
いやぁ、やっぱり面白いですね。でも、橙子さんの性格とかが今一掴めません……。なので、ちゃんと投影出来ているか心配です。
Ｆａｔｅの方は……全くやってません。ゴメンナサイ（´・ω・｀）
ですが、アニメ版の方は全部見るつもりでいます。

10．セイバーVS冬木の虎（笑）

衛宮家の食卓はいつも賑やかだ。

「一郎君っ、今日も学校サボったでしょ！」

「サボり違う、早退。それと先生、食事中に行儀が悪いですよ」

腰を浮かせて両手でテーブルをバンッ、と叩き、冬木の虎ことタイガーは俺を手に持つ箸で指してくる。

「一郎君の場合はどっちだって一緒でしょ！　そういう訳だから、私にそのミートボールを渡しなさいっ！！」

「毎度毎度、脈絡が無さ過ぎるんだよ先生はっ！」

俺が皿に確保している肉団子に箸を伸ばして取ろうとするタイガーの猛攻をひらりと躱し、彼女の箸がギリギリ届かない場所に俺は座りなおした。

それでも尚、彼女はさらに腰を浮かせて取ろうとしてくる。その滑稽さとハングリー精神には賛辞を送りたい。

「くぅぅ……と、届かない」

涙目でそう言うタイガー。それを見て苦笑しているまっさん。何かを思考しているのか、こちらを全く見ておらず呆としている衛宮君。どうせ衛宮君の事だ、今も別室で素直に待機し続けているセイバーの事でも考えているのだろう。このお人好しめ。絶対にオレオレ詐欺とかに騙されるタイプだよ、彼。

「あと、少し……」

「……」

余りにもタイガーが哀れになってきたので、皿を持って彼女の近くに行き、２つほど皿に装ってあげました。
それで気を好くしたのか、タイガーは満面の笑みで俺の肩をバシバシと叩いて来る。ちょっと痛かった。

「ありがとー、一郎君！　あ、でも次からはちゃんと授業に出ること。わかった？」

「はいはい」

箸を宙で泳がせながら説教をするタイガーに、俺もご飯を食べながら適当に相槌を打っておく。
ぶっちゃけ俺、彼女よりも年上だからなぁ。何と言うか、彼女に説教されると妙な気分になる。ちなみに、彼女は２５歳くらいだったと思う。

さらに言うと、２５歳の癖に祖父である藤村　雷画から小遣いを貰っているらしい。……色々と社会人としてアレな気がしないでもない。つーか教師としての給料貰ってるのに小遣いってどうよ？

「なら良し！　士郎、ご飯入れて！」

タイガー改め藤村先生の声が聞こえていないのか、未だに衛宮君は自分の世界から帰ってこない。
放っておくのもアレなので、俺は彼の肩を持って軽く揺さぶった。

「――っ、え、どうした一郎？」

「先生がご飯を入れて欲しいんだとさ」

「あっ、ああ……」

キョトンとした顔で藤村先生から差し出された茶碗を受け取るも、依然心ここに非ずと言った風だった。
衛宮君にご飯を入れてもらった茶碗を受け取る藤村先生を見るに、彼女は衛宮君の異変に気づいてはいないだろうが、まっさんは恐らく気付いている。
普段から儚い感じを醸し出している彼女を、より一層弱々しく思わせる憂慮な面持ち。それを衛宮君に向けている。しかし、当の本人である彼はそれに気付かない。

「先輩、食欲無いんですか？」

「あ～、いや、そう言う訳じゃないんだ。ただ――」

まっさんの問いに曖昧な答えを返し、続く言葉は最後まで言い切らず彼の心中へと消え失せる。
そんな彼の態度の所為で、まっさんの心労は大きくなるばかりだ。
彼女は衛宮君の事となると、いつもこんな風になる。
どうやら、よほど彼が好きらしい……あぁ、青春っていいなぁ～。
クソッ、俺にも彼女がいればッ！！

「ひ～、ふ～、み～……さっき一郎君から2個もらったから――――10個！」

などと藤村先生が言い、大皿に装ってあるミートボールへ手を付けようとした時――

「待ってくれ」

「……ほ？」

何か思いついたような口振りで藤村先生を静止させる衛宮君に、俺は一縷の懸念を抱いた。
端的に言えば、『嫌な予感』と云うヤツである。非常に残念な事だが、こういう時の俺の予感は良かれ悪かれ外れた事が無い。

「すぐに戻って来るから、そのまま待っててくれないか？」

唖然とする二人を背に、衛宮君は居間を後にする。衛宮君の事だし、セイバーを連れて来るのだろう。

俺は溜息交じりにそう思いつつ、そうする事によって必然的に起こるであろう未来を想定し、再び大きく溜め息を吐いた。

＊　＊　＊

―――夜、道場。

色々あって俺達は道場に来ていた。もうね、説明するのも面倒臭い。

「私に負けたら帰ってもらいますから。いいわね？」

どこぞの小姑のような言動を吐くのは、剣道5段、冬木の虎こと藤村大河。
それに相対するのは、生真面目を絵にかいたような欧州出身っぽい金髪少女、セイバー。

想定した通りの未来に俺は引き攣った顔で思わず苦笑いを零し、藤村先生のパワフルさに感嘆した。
あのセイバーに戦いを挑んだ時点で、俺は彼女を英雄として認めてあげたい。はっきり言って、一般人レベルの剣道家がセイバーに勝てる訳がない。
それこそ子供と大人の喧嘩だ。子供がどう足掻いた所で、これから始まるのは一方的な私刑（リンチ）でしかない。最も、それはセイバーが容赦なく本気を出したらの話だが。
それはそれで面白そうだからいいんだけど、せめてセイバーには藤村先生を殺さない程度の手加減はしてほしい。流石に、この家で殺人は不味いだろう。まっさんも居るし。

竹刀でも、明確な殺意があれば人を殺すのは簡単だ。しかし、殺意

が無ければ話は変わる。言ってしまうと、竹刀では急所を突かない限りある程度は大丈夫なのだ。
だが、俺と模擬戦をした時の最後の一撃を藤村先生に叩き込んでしまったら、たとえ頑丈な身体をしている彼女でもアバラに罅は確実に入る。
最も、セイバーの事だから弱者を虐げる嗜好は無いだろう。むしろ彼女は、そう言った行為に虫唾が奔るタイプだと思う。
なので藤村先生は大丈夫な筈だ……たぶん、絶対、恐らく、確実に。

「構いませんが、それはどういった理屈でしょう？」

「分からないの？　ライオンは我が子を谷底に突き落とすって言うでしょ？」

「無茶苦茶だ……」

セイバーの真面な疑問を藤村先生が屁理屈で正面から切って捨て、そんな彼女の言動に衛宮君が頭を抱える。
ちなみに、衛宮君とまっさんは並んで邪魔にならぬよう道場の隅に正座して座っています。
俺は二人の審判なので、二人の間に立っていたんだけど怠いんで膝を折って座ってます。所謂、ウンチングスタイルです。

「士郎は黙って！　大体、アンタの為にここまでやってるんでしょう！？」

そうだったのか……全く知らなかったよ。というか藤村先生、当の衛宮君がポカーンってしてるのは何でですか？

「――分かりました。とにかく、貴方を納得させれば良いのですね？」

うわぁ、セイバー納得してくれたよ。実はすっごいイイ人なんじゃ……。

普通だったら「フザケンナッ、死ね！」とか言って竹刀投げ捨てて帰っても良いと思うんだけど。……それは言い過ぎか。

「何よ、その自信満々な言い方は……見てなさい、私を納得させるのは大変なんだからーーー！！」

「おいっ、まだ開始の合図もしてないぞ先生――――！」

俺の言葉を聞かず、竹刀を大きく振りかぶりセイバーへ突進する藤村先生。しかし、セイバーは動かない。

１秒と掛からずセイバーとの距離をゼロにし、渾身の力で藤村先生はセイバーへ竹刀を振り下ろした！　だが――――

それは一瞬、閃光の如き速さだった。

「――納得していただけましたか？」

いつの間にか藤村先生の遥か後方に移動したセイバーの手には竹刀が握られていた。
対する藤村先生の手は空――――見れば誰もが理解する光景であり、誰もが目を疑いたくなるような光景。
あの一瞬でセイバーは手刀で藤村先生の竹刀を上空へ刎ね飛ばし、竹刀が浮遊している間に落下地点へ移動。そして竹刀を掴んだ訳だ。

セイバーの凄さを垣間見ている衛宮君は、何度も見て来た出鱈目さを改めて感じ取り苦笑い。
まっさんと藤村先生は狐に化かされたような表情でセイバーを見つめていた。そりゃそうだ、初見なら誰だってそうなる。
外見が少女なだけに、余計タチが悪い。

「ふっふっふ……」

不気味に笑いながら背中に手を入れ、竹刀を取り出す藤村先生。……色々と突っ込みたいが、この際無視しよう。

「それで勝ったと思うなよぉーーー！！」

「……」

無言で構えるセイバーに、藤村先生は再び竹刀を振り被って突進する。

ボンッ――――いきなりセイバーの持つ竹刀が手品の如く造形の花に変化した……どういうことなの？

初めて見る奇怪な戦法に数瞬唖然としてしまうセイバーだったが、再び自身に向かって放たれた一撃を手刀によって難なく迎撃した。数秒前に見た光景が再度繰り返される。やがてセイバーが竹刀（花の造形ｖｅｒ）をその場に捨て、本物の竹刀を手に大河へと歩んで行く。

「まだ続けると言うのなら構えますが、そこまでしなくても分かるでしょう」

茫然自失の藤村先生の頭を竹刀で軽く叩き、それを受けて彼女はその場に崩れ落ちる。
滝のように涙を流し、そして駄々を捏ねる子供のように藤村先生は叫んだ。

「変なのに士郎を取られたぁーーー！！！」

頭を抱える衛宮君を見て、少しだけ彼に同情してしまった。

その後、セイバーは藤村先生と間桐さん（衛宮君に再度教えてもらいました）とで三人川の字になり寝ることとなった。
何でも、女同士で話し合う事があるらしく、俺と衛宮君は追い払われてしまった。

＊　＊　＊

――――朝　衛宮家　居間

昨夜に仲良くなったのだろう、セイバーはすっかり衛宮家に馴染んでいた。
これも藤村先生の人柄と間桐さんの優しさが成す技なのだろう。二人には時々驚かされる。

確かに、サーヴァントは一般人から見れば人間にしか見えないからな。
とにかく、ギクシャクした空気にならなくて良かった。心なしか、ご飯も昨日より美味しく感じる。
不意に間桐さんがリモコンでテレビを点ける。そこから流れて来たニュースは少し物騒なモノだった。
≪今朝未明に発見された被害者は５０人を超え、救急病院で治療中です。尚―――≫
画面を見ると、そこに大きく『新都でガス漏れ事故』と表記されてある。

「ガス漏れ、ねぇ」

どうもキナ臭いな……。遠坂辺りなら何か知ってるかな。今度会ったら探りを入れてみよう。
あ、でも小姑なアーチャーが傍に付いてたんだった。うわぁ、何か嫌味言われそうだ……。
衛宮君をパシらせるのは―――駄目だ、衛宮君の事だから無防備に近づいて遠坂を逆上させかねない。

「どうすっかなー……」

「どうしかしたのか、一郎？」

「おやおや、朝から悩み事？　良かったら先生が聞いてあげようか？」

「私も力になりますよ？」

三者三様に俺を心配してくれる。クッ、こんな少年時代を送りたかったよ！

俺の少年時代なんて……orz。世間一般で言う所の『黒歴史』ってヤツだね。もう出来る事なら封印したいです、ええ。

「実は俺、間桐さんに――――」

「えっ！？」

あまりの超展開に脳がついて行かず短く声を上げつつも呆然とし、しかし頬を僅かに紅潮させる間桐さん。

「さっ、桜ちゃんに？」

興味深々なのか、身体を前のめりにして俺の顔を覗き込んでくる藤村先生。

「一郎、お前――――」

全てを察したと言わんばかりに悟った目で俺を見つめて来る衛宮君。
……何でか知らんが、無性に腹が立った。

それはともかく、俺は言葉を続ける。

「――――嫌われてるみたいなんだ」

「「「……えっ？」」」

唖然呆然ポカーンな三人。
その中で一番覚醒が早かったのは、やはり間桐さんだった。

「そ、そんなっ、私は田中先輩の事は好きですよ？　その、友人としてですけど」

この瞬間、俺の春がオワタ……。いや、分かってたんだよ？　彼女が衛宮君を好きって事くらい。
でも、癪じゃないですか。俺の、俺の初恋だったんだ！！　……
なんて事はございません、ゴメンナサイ。
俺が彼女に抱く気持は彼女と全く同じです。友人として好きです。
そこに恋愛感情は発生しません、間違いなく。
と言うより、俺は誰かを愛せません。無理です。例外があるとするならオネーサマくらいです。

「嘘だッ！」

言ってみたかった台詞その一、『嘘だッ！』。
これを言いたいが為にこの状況を作りました。後悔は無い。反省もしない。でもちょっと罪悪感はあります。
男は罪を背負って生きて行くもんなのさ……今の台詞、カッコイイな。またシリアスっぽい時に言ってみよう。

この後、俺の気まぐれで作り出した状況が収束するまでに１０分ほど時間を弄したが、それを一々説明するのは面倒なので省いておく。
この１０分で分かった事と言えば、いつか衛宮君に言った『桜さん満面の笑みで「嫌です☆」事件』は俺の勘違いだったらしい事くらいだろうか。

どうにも、その事件当初は俺の評判はかなり悪かったらしい。聞けば、「変態、狂人、露出狂」とか言われていたそうな。
ぶっちゃけ露出狂以外今も変わらず言われてるじゃねぇかッ！　と俺が突っ込んだけど、三人は同時に俺から目を逸らして「ごめん」と謝ってきた。……泣いていい？
そんな事を言われているとは露知らず、衛宮家に毎日通い続けている間桐さんに軽い気持ちで「桜って呼んでいい？」とか言ったのだ。
当然、彼女的には『ここで頷いたら襲われる』的な事を思うだろう。
自分で言ってて悲しくなるけど、変態呼ばわりされてる奴にそんな事言われたら俺だってそう思う。
彼女は当たり障りのない言葉を考えたが、短い時間では結局思いつ

かず「ごめんなさい」と苦笑交じりに口にした。それを俺が「嫌です☆（満面の笑みで）」に取った訳だ。

嫌な事件、だったね……。

＊　＊　＊

――昼休み　屋上

今日も忌々しい程に快晴だった。あの青い空をこの手で黒く塗りつぶせれば良いのに。

「太陽（ひかり）なんて消えてしまえ」

久しく呟くその台詞に、不思議と笑みが零れてしまう。
幼少の頃はよくその言葉を口にした。まるで呪いを掛けるかの様に。

「そんな事より、今日の弁当のおかずはっと――――お、ハンバーグじゃないか！」

俺の大好物を入れてくれるとは、中々やるな衛宮君。
日陰で弁当の蓋を開けて割り箸をパチン、と小気味良い音を立てて割る。
そして割り箸を親指に挟み、手を合わせた。

「いただきます」

今日はいつも通り、衛宮君は生徒会室で食べるらしい。柳洞君だっけか、さっきチラッと見たけど元気無かったなぁ～。
そういえば遠坂とすれ違った時、妙に不機嫌そうだったなアイツ。
どうせ衛宮君に普通に挨拶されたのが気に食わなかったとか、そう

いう理由だろう。
彼って初心者だから、魔術師として板についてる彼女にしてみれば舐めてるとしか思えない行動を平然と取るからね。そう言った意味じゃ、殺されても文句言えないな衛宮君。

「それはともかく――――」

校門を潜った時に感じた違和感。アレは恐らく何らかの結界だろう。範囲は学校を覆う程度と言った所か。
一々破壊するのも面倒だし、こりゃ面倒事になる前に帰った方がよさそうだな。
ぶっちゃけた話、他人がどうなろうと知ったこっちゃないんで。衛宮君は……言ったら絶対に首突っ込むよなぁ。どうしよ？

居候させてもらってる身としては、出来れば彼を生かしてやりたい。最も、死んだら死んだで何とかなるのだが。
けど、そうなると余計に面倒かつ俺への負担がでかいので絶対にやりたくない。つーかやらん。死んだら放っておく。悪いけど、そこまでの価値は衛宮君に無い。

「俺はキャスターとクソガキとランサーのマスターを殺したいだけなのになぁ……」

最初はキャスターだけだったのに、気がつけば3人になっている。
これ以上増やすと逆にどーでもよくなりそうなので、もう殺されるのは御免被りたい。

「1日に4回死ぬとか、これだと『お祭り』じゃなくて『死亡遊戯』だな」

死んで亡くなって遊んで戯れる……よく分からん。

最後の一切れとなったハンバーグを飲み込み、口直しにお茶を飲んで立ち上がる。

「さてと、一応衛宮君に結界の事言っておくか……」

どうせ解除するとか言いそうだ。そうなったら……まぁ、手伝おうかな。

ご飯も宿も全部提供してもらってるし、流石に借りっぱなしってのは良くないからな。

昼休みも終わり、俺は久しく5時間目を迎えることとなった。

＊　＊　＊

目を覚ますと、教室に生徒は一人もいなかった。

「えぇ～……」

誰か一言くらい声掛けろよ。これってさ、軽くイジメじゃね？　あ、やばい、何か涙出てきた。

「衛宮君にも放置されるとか……もういいっ！　あのリア充予備軍は結界の中で死ねばいいのだ！！　……はぁ」

溜め息しか出ない自分に喝を入れ、椅子を引いて立ち上がる。
机の中に入れておいたサングラスを掛け、横に掛けてある鞄を手に取り、夕暮れに染まるグラウンドを眺めた。

「……青春、か」

『青い春』なんて言うけど、これじゃあ『朱い春』だ。いや、どっちでもいいんだけどさ。

なぜだろう――不明だが、あの夕陽を見ているとナーバスな気分になる。こう、哲学的な事を考えたくなると言うか……

「あ～～～っ、やめやめ！　そういうのはロマンチストなオネーサマの分野だっつの！！」

哲学なんて性に合わない。俺はジャンプを読んで友情、努力、勝利に感動していれば良いのだ。

こんな小難しい事を考えていると頭が変になる。こういうのは、たまに呆としている時に考えればいい。

頭をボリボリと掻き、机の間を縫うようにして教室を出る。そして、左へ首を向けた時だった――――

衛宮君がいた。左腕の魔術刻印を発動させている遠坂と共に。

「なぁにあれぇ……」

そう呟かずにはいられなかった。

あとがき

中途半端でゴメンナサイ（，・ω・、）
今回はさらに厨二に磨きが掛かっております。
恐らく、このＳＳを完結まで読み切って下さった時、貴方は真の厨二王となれるでしょう。
ちなみに、厨二王になったら努力次第で邪気眼に目覚めれます。頑張れっ、これを読んで下さる読者の皆様！

冬木の虎さんって一般人からすればクソ強いのに、セイバーと闘ったが為に弱く思えてしまう。一応、初期の衛宮君の数倍は確実に強いのにね。

１１．大して進展してない…ｏｒｚ

遠坂の尋常ならざる雰囲気に気圧され、衛宮君は彼女に壁際へと追いつめられる。
遠坂は衛宮君に、衛宮君は遠坂に意識が集中しているらしく、俺の存在には全く気付いていないようだ。

俺と彼らとの距離は２０メートル前後。魔術を使わなくとも、この距離なら生身で３秒と掛からずにゼロに出来る。
だが、距離を詰めたからと言って遠坂をどうするのかと聞かれれば、ちょっと返答に困ってしまう。
ひとまず俺は壁の出っ張り部分に身体を隠し、二人の会話を盗み聴く。事と次第によっては遠坂を殺す事も視野に入れなければならない。

今、彼女は左腕の魔術刻印を発動させ、左手をピストルの形に構えて人差し指を衛宮君に向けている。
ガンド――呪いたい相手を指差す事によって発動する呪術。
しかし、遠坂のソレはそんな生易しいシロモノではない。たとえるなら、アレは――

――弾丸。

「うわっ！？」

放たれた漆黒の弾丸を、衛宮君は身体を強引に右へ持って行く事によって紙一重で躱す。
そのまま勢いを保ち、遠坂の脇を抜けて前方の階段を下へ降りる。
否、アレは跳び降りたと言った方が正しいか。
遠坂に気付かれないよう気配を殺して近づき、衛宮君の行動を感心しながら眺める。

「チッ、逃がすか！」

まんまと逃した悔しさに遠坂は思わず舌打ちをする。
しかし次の瞬間には視線を階段へ奔らせ、衛宮君と同じく怯む事無く階段を跳び降りた。

「……最近の十代は元気あり余ってんなぁ～」

などと他人事のように呟き、二人が降りて行った階段を一段一段ゆっくり降りて行く。
下の階からドンドン、とガンドを盛大にぶっ放している音が響いてきた。衛宮君はまだ『狙撃手』から逃げ続けているらしい。

「捕まりそうになったら助けようと思ってたけど、この分じゃ大丈夫そうかな」

軽く頭を掻き、なぜだか笑っている顔はそのままにして階段を降りきる。
右を向き、左を見た。そこには自身の眼前の教室に結界を張ろうとしている遠坂の姿があった。
その様子を見るに、教室内には衛宮君が隠れているらしい。今頃、彼は結界の所為で退路を断たれているから大慌てのはずだ。
結界を張り終えた遠坂は鍵の掛かっている教室のドアをガンドでぶち壊し、室内に入った瞬間機関銃の如くガンドを連射する。
恐らく机を強化して防御している衛宮君を攻撃しているのだろう。
流石にこれ以上やれば衛宮君も無事じゃ済まない。下手をすれば死ぬ事だって有り得る。

「それは困るな、うん」

ウチの料理長が死ぬのは御免被りたい。アイツの飯は美味いし、何より藤村先生と間桐さんがめっさ悲しむ。
藤村先生はともかく、間桐さんは絶対にヤンデルになるからヤバイ。
下手したら俺にまでとばっちりが来かねない。
間桐さんって何か浅上さんに似てるんだよなぁ……気弱な所とか、一歩間違ったらヤバげになりそうな雰囲気とか。

「今何してるんだろ、浅上さん。またどっかに誘ってみようかな」

呟き、室内を充満している煙は開かれたドアから廊下へと逃げるように吹き出した。
その煙をかい潜るように衛宮君が、計画通りと言わんばかりに口元を歪めて息を切らした遠坂が出て来る。衛宮君は後方、遠坂は先ほど自分がドアを壊した前方から現れた。
数度咳き込んだ後、衛宮君は遠坂の数メートル後ろにいる俺を見て驚愕に目を見開く。

「いっ、一郎！？　何で、此処に？」

「――ッ！？」

衛宮君の言動で遠坂は咄嗟に俺の方へと振り返る。
気配を断っていたので全く気付かなかったのだろう。その証拠に、愕然として顔を強張らせている。
鋭く俺を睨み付ける事で、殺意を叩き付けることで、自身の内に芽生え始めた恐怖をねじ伏せようとしている遠坂を見つめ返す。

「二対一だぜ、遠坂。降参したほうがいいんじゃない？」

頭の良い遠坂の事だ。俺と衛宮君が共謀して自分を嵌めたとでも考えているのだろう。
だが、衛宮君がそんな謀略を張り巡らすとは思えない。故に、俺が疑われるわけだ。

「……全ては貴方の作戦通りって事かしら？」

やっぱりね～。頭が良すぎるってのもアレだね。結果オーライとか考えないんだもん。

「いいや、全然。ぶっちゃけた話、教室から出たら偶然遠坂達に出くわしただけだよ。気になったから後をつけてみたら、こういう状況になったワケ」

「そんな都合の良い話を信じると思ってるの？」

「……わかった。百歩譲って仮に俺が遠坂を嵌める策を考えたとする。でもさ、それに衛宮君が乗ると本気で思ってるのか？」

「それは……」

遠坂はあからさまに視線を逸らし、背後にいる衛宮君を見る。
当の本人はキョトンとした面持ちでこちらを見ており、それが遠坂を答えに導いた。
しかし同時に彼女は溜息を吐き、捲っていた左腕の袖を卸して魔術刻印を解いた。

「貴方の言う通り、アイツがそんな魔術師的な事を考えるわけ無いわね」

「……何だかバカにされた気がするのは俺の気のせいか？」

ジト目で俺と遠坂を睨む衛宮君に、笑顔で言葉を返しておく。

「気のせいだよ。遠坂が「衛宮君は素直で優しいお人好しね」ってさ」

「……」

どうやら余計に機嫌を損ねてしまったらしい。
仕方ない、帰りしに肉まんでも買って機嫌を直して貰うか。藤村先生だとそれで懐柔できるし。

「それで遠坂。何で衛宮君を襲うようなマネをしたんだ？」

「サーヴァントも連れずに歩いてる強化しかできない未熟者の魔術師を見たら、誰だって襲い掛かるでしょう？」

苛立ちを隠さず親の敵のような目つきで衛宮君を睨む遠坂。
衛宮君は申し訳なさそうに俯き、小さく誰に言う出もなく「ゴメン」と呟いた。

「ま、そりゃそうだ」

予想通りの答えが返ってきたので、こちらも用意しておいた返事をする。
遠坂は流し目で衛宮君を見据えながら、さらに言葉を続けた。

「もし貴方が来なかったら、衛宮君の令呪は私のモノだったのに」

それはつまり衛宮君の敗北を意味し、死すらも想像させる言葉。
当然セイバーの所有権は遠坂へと渡り、たとえ生存していたとしても衛宮君は何らかの形で聖杯戦争には参加できなくなっているだろう。
遠坂の発言に衛宮君は数秒の思考の後に真意を悟り、ニヤッと笑う彼女を強張った顔で、しかし真正面から見つめ返した。
その双眼に宿る意志は強く、セイバーは絶対に渡さないと訴えかけているかのようだ。遠坂もそんな衛宮君に気圧され、不機嫌そうに彼から顔を背けた。

「いやいや、そうとは限らんぜ」

だが、それを俺は一笑の元に切り捨てる。
首を横に振り、含みを持った笑みを遠坂へ向けた。

「む、何でよ?」

遠坂は俺の言動が気にくわなかったようで、不服なのか眉間に皺を

寄せて俺を見る。
確かに生粋の魔術師かつソレの中でも特に優秀な彼女からしてみれば、あんな半端物に敗北する瞬間など脳内で１０００回シミュレートしたって浮かばない。
俺だって自分が衛宮君に負ける瞬間なんて、どんなに考えても思いつかない。しかし、彼には俺たちにない秘めた力がある。それは――

「正義の味方になりたい。それってさ、まるで漫画か何かの主人公みたいじゃないか」

今のジャンプでも希にしか見ない、真っ直ぐな理想を持った少年。
力は弱いけど、その意志は誰よりも気高く、崇高で、美しい。
幼少の頃、誰もが抱いたあの理想を捨て去ることなく、今も抱き続ける歪な存在。故に、俺は彼が綺麗だと思えた。

「「はぁ？」」

戯けたように言う俺に、遠坂といつの間にか彼女の隣まで歩んでいた衛宮君も顔を顰めた。
そんな二人の態度に俺も顔を顰め、しかし言葉を続ける。

「だから、衛宮君にはあるんだよ。絶対的な『運命力』が……たぶん」

『運命力』とは不幸や幸運のようなモノではなく、分かりやすく言えば厄介な物事に遭遇する確率であり、ソレに遭遇しても生き残る可能性を現す。
両者が低ければ脇役。主にエキストラなどと言うモノだろう。前者が高く、後者が低ければ引き立て役。この場合はやられ役とでも言うべきか。前者が低く、後者が高ければ準主役。そして、両者が共に高い存在を人は主役と呼ぶ。
衛宮　士郎という少年は、まさに主役と呼ぶにふさわしい。遠坂凛という少女は本来、主役と言っても過言ではないのだが、衛宮士郎の介入により立ち位置が変化した。
彼がヒーローなら、彼女はヒロイン。他にもヒロインと呼べる存在は二人ほどいる。セイバーや間桐　桜がそれだ。

知らず聖杯戦争に巻き込まれ、一度命を落とした強化しか出来ない半端な魔術師の少年――衛宮　士郎
そんな少年の命を救い、聖杯を勝ち取る為に奔走する生粋の魔術師の少女――遠坂　凛
衛宮　士郎とまるで家族のような関係を持つ彼の後輩――間桐　桜
何の因果か、衛宮　士郎に召還された気高き騎士の少女――セイバー

何というか、すごく…ハーレムです……。いいなぁ、衛宮君。俺と替われ！

……話を戻すが、数年前に起きた事件を例にしよう。アレは両儀式という存在が主人公だった。
また、黒桐　幹也という存在も主人公だった。あの二人は両者が両者を助け合い、言うなれば一心同体というヤツだろう。その為、二人が主役となったのだ。
あの時の俺とオネーサマの立ち位置は準主役だろうか。詳しく分類

するのなら、所謂ジョーカーというモノだろう。
出たら最後、眼前の敵を一掃する完全無欠の存在。しかし、その行動は奇術師の如く理解不能。俺はともかく、オネーサマは間違いなくソレだと言える。
だってあの人の考えてる事なんて理解したくない。理解出来ないではなく、『したくない』のだ。怠いし、疲れるし、面倒だから。

「一郎って小難しい話は嫌いだと思ってたけど、意外にロマンチストな所もあるんだな」

脳内であの時のことを一人回想していたら、不意に衛宮君が思いも寄らぬ言葉を吐きやがった。

「……は？」

何言ってんだコイツ。ロマンチストなのはオネーサマだろ。つーか、その微笑ましい顔やめろ衛宮。

「凄く楽しそうに話してたぞ、お前」

ロマンチストな俺……うわぁ、キモすぎる。
どうせなら厨二病と言ってくれ。俺はタキワザさんのように『真の邪気眼』保有者になりたいんだ。

「意外と夢想家なのね、貴方」

珍しいモノを見る目で遠坂は俺を見てくる。何じゃい、そんなに俺がロマンチストだと変かコラ。
いや、嬉しいんだけどさ。でも……何となく、うん。色々あるよね？

「厨二病と言え。ロマンチストとか夢想家とか言われたら背中が痒くてしょうがねぇ」

衛宮君と遠坂は同時に「厨二病？」と呟いて首を傾げた。……まさかこいつら、厨二病を分かっていない、だと？

「まぁ、ソレがあろうとなかろうと、私は衛宮君なんかに負けないわ」

「さいですか」

なんか扱いされて苦笑している衛宮君を見て、こいつ絶対結婚したら尻に敷かれるタイプだなぁ～と思った。
そんなどーでもいい事を考えていたその時だった――

「キャーーーー！！」

下の階から響いてきた女性の悲鳴。どうやら、まだ学校に生徒が残っていたらしい。
衛宮君は反射とも言える速さで悲鳴が聞こえてきた方向へと走って行く。

「ちょっと待ちなさいよっ！」

遠坂も衛宮君の後を追って走り去る。

「……いやはや、なんかキナ臭くなってきたよ」

一人ぼやいて二人の後を追い掛ける。

先ほどの悲鳴、ただの変質者とかなら良いのだが。
もし、それがサーヴァントや魔術師の仕業だった場合、恐らく学校に張り巡らされている結界と何らかの関係性はある。
いや、もしかすればそいつが犯人という可能性も十分にあるだろう。
そうだった場合、遠坂はともかく衛宮君は危険だ。彼には何の攻撃手段もありはしない。かといって、令呪を使うのは勿体ない。

「冗談で言ったんだけど、こりゃマジに運命力とかあるんじゃねぇの衛宮君」

階段を跳び降り、足音のする方に向かって廊下を駆ける。
廊下の行き止まりまで行くと、そこには気絶している女子生徒とその子を介抱している遠坂の姿があった。

「あり、衛宮君は？」

「その子を襲った奴を追って外に行ったわ。ったく、あのバカ！」

近くによって訪ねる俺に、遠坂は衛宮君の無謀さ加減に毒を吐く。

「その子は？」

「大丈夫、命に別状はないから」

やはり衛宮君が気になるのだろう。声に若干焦りを帯びている。

「さいですか。なら、俺は衛宮君の方に行きましょうかね」

面倒くさいけど、サーヴァントとかだったら確実に衛宮君だと死ぬしな。
遠坂もまだ少し掛かるみたいだし。

「気をつけなさいよ。たぶん相手はサーヴァントよ」

「ん、わかった」

振り向かず、背を向けたまま右腕を上げて手を振っておいた。
そして心中で今の俺、かっこよくね？　とか思った。

あとがき
ＰＣぶっ壊れた……ｏｒｚ
なので、知人のＰＣ借りて投稿しております。
めっさ書き方が替わった気がする。
何日かぶりに書いたので、何か色々と不安です。
徐々に調子を取り戻そうかなぁと思っとる次第であります。

番外編ー空の境界『痛覚残留1』ー

雨が降っていた。

ざぁざぁという無機質な音を立て、曇天より落下してくるそれはコンクリートの地面に当たり、跳ねる。
やがて雨足は強くなり、ザァァという持続的な音へ変化していた。
そんな大雨の降りしきる中、一人の男が傘も無く走っていた。

「最悪だチクショウ！」と毒吐きながらも足を止めず、むしろさらに速度を増して人気の無い道を駆けて行く。
手に持っていた鞄を傘代わりに頭上へと移動させるが、この激しい雨の中では無意味に等しい行為だろう。
その証拠に、男の衣服はまるで水に浸かったかのようにずぶ濡れで、膝辺りまで伸びた白い長髪も雨水で水分を過剰に含み、滴っていた。

男の整った中性的な顔立ちは濡れた衣服の不快感によって歪み、やがて鞄で守るのを無意味と悟ったのか頭上からそれを除ける。
鞄を普通に持ち、何を思ったのかその場で立ち止まる。
男は右手にある建物をしばし眺め、ニヤリと笑った。

「ちっと雨宿りさせてもらうか」

その建物に誰もいない事は一目瞭然であった。
人の気配が全く無い事もあるが、何より全く整備されていない、言うなら廃屋と呼べる建物の景観が男をそう思わせた。

事実、傾いた玄関扉を少々強引に開けて中に入っても、こちらを伺うような人間は――――いた。

「誰だテメェ！！」

男はまさかの展開に眼を見開き、しばらく唖然とした。
男の胸倉を掴み、射殺すような目付きで眼を飛ばしてくる青年。外見から察するに、齢は二十歳前後。
染めた髪にピアス、クスリでもやっているのか、男を睨み付けている眼が若干イッてしまっている。
今の時代に若者の一人や二人がクスリに手を染めていた所で珍しい事は無い。所謂、巷で言う所のヤンキーという人種だろう。

「名前？　白子だけど。それよりさ、ちょっとここで雨宿りさせてくんね？」

白子と名乗った男は軽薄な口調と態度でそう言うと、胸倉を掴む青年にニカッと笑う。
それが癪に障ったのか、青年は血走った目をカッと剥いて空いているほうの手で白子へと殴りかかった。
しかし白子は自身へと迫る拳を首を傾けることで回避し、男の身体を引き寄せて鳩尾へ膝蹴りをお見舞いする。
「カハッ！？」という小さな声を上げ、男は呼吸困難と痛みによって白子の胸倉から手を離し、たたらを踏んで身体を前へ倒れさせた。
白子は男が倒れる間際に横へ退き、倒れ伏した男を一瞥して廃屋の中へと進んで行く。

ギィ、という古い建物特有の木の撓る音を鳴らしつつ歩いて行き、
眼前にある扉のノブを回して中へと入った。

数人、男がいた。
一人、女がいた。

乱れていた。
充満しているすえた臭いに、白子の顔は自然と歪む。

この建物はバーか何かだったのだろう。
ビリヤード台の上に女を乗せ、一人の男が女の股座を開かせていた。
よく見れば、女の左乳房はまるでハサミで切られたかのように無い。
そう、無いのだ。
上半身裸で女の股座に身体を入れている男の右手に持つナイフを見て、白子は確信した。

――――こいつがやりやがった――――

雨で気分が悪かったのが、こんなモノを見てしまったせいで余計に気分が悪くなった。
酷く気分が悪い。滑稽なほど気分が悪い。頭痛がするほど気分が悪い。吐き気がするほど気分が悪い。眩暈がするほど気分が悪い。
笑ってしまうほど気分が悪い。嗤ってしまうほど気分が悪い。哂ってしまうほど気分が悪い。ああ――――気分が悪い。

誰のせいだ？　こいつのせいだ。

誰が悪い？　こいつが悪い。
ならばどうする？　視界から消す。この世から消す。つまり、殺せばいい。

白子の脳裏を駆け巡る思考。自然と手には、鞄から取り出したカッターナイフが握られていた。
彼の眼にはもう、ナイフを持つ男しか見えていない。故に、次の瞬間起きた出来事に驚愕する羽目になる。

「ギィッ！？」

男の身体が捻れた。そうとしか言いようが無かった。
科学でも魔術でも、まして魔法でも無い。言うなればそれは、超能力。

白子は目の前で起きた事象に唖然としていた。
その男はリーダー格だったのだろう。リーダーが意味不明の方法で死んだ今、他の男たちの眼には恐怖しか無かった。
その中で唯一恐怖ではなく、むしろ笑みすら浮かべていた存在――――ビリヤード台の上で上品に座っている女。左乳房が無くなって尚、その姿は美しかった。

やがて次々と男たちは捻れていく。
どういうタネでああなっているのかは不明だが、どうやら座している女がやっているらしい。
白子は驚きはしたものの、次には感心した面持ちでその惨劇を観察していた。
しかし、この場から逃げようとする男は容赦なく白子がその首を刎

ね、殺した。
異常さという点で女には劣るものの、たかがカッターナイフで人間の首を容易く刎ねれる白子も十分常軌を逸していた。
そうして部屋の中にいた男たちは捻れ、あるいは首を刎ねられて死んだ。
死臭と性臭の混ざり合った異臭に、女の眉間に自然と皺がよる。しかし、張り付いたような笑みは一向にそのままだ。
白子は確信する。こいつは殺人に快楽する人間だと。しかし、彼にとってそんな事はどうでもよかった。

ガタン、と扉の方から音が聞こえた。
そこにいたのは、先ほど白子が気絶させた男。
しかし白子と女がそちらへと眼を向けた瞬間、男は絶叫のような悲鳴を上げて走り去った。
白子は特に追いもせず、肩を竦めて女を見る。ビクリと身を竦ませる女に溜息を一つ吐き、そして話しかけた。

「お前さん、服は？」

自分の考えていた全ての予想を裏切り、平凡な事を口にする白子に女はキョトンとしてしまう。

「そこに……」

女の指差した方に首を回し、そこにあった服を取って女に渡す。

女は小声で「ありがとう」と言うと、黙々と服を着ていく。白子は女が服を着る間、濡れた自分の上着を脱いで雑巾のように絞っていた。
女が着衣し終わり、白子も絞りに絞った服を着て、それでも湿っている服に「最悪」と一人ごちる。

「お互い自己紹介もしてなかったな。俺は白子。君は？」

「……藤乃、です」

お互い素性を知られたく無いのだろう。あえて苗字は言わず、名前だけを口にする。
白子は藤乃と名乗った少女が苗字を伏せたことを特に気にせず、話を進めた。

「まぁ、俺たちは殺人犯になった訳だけれども……」

服を絞る際に置いたカッターナイフをビリヤード台から取り、軽く宙に投げて弄ぶ。
殺人犯という言葉に藤乃の身体が強張った。

「藤乃さん、自首する気は？」

「それは、困ります。白子さんはどうするつもりなのですか？」

「俺？　する訳ないじゃん。だってこれ、過剰防衛って言っても信じてもらえないぜ？」

愉快そうに笑う白子とは対照的に、藤乃は依然緊張したままだ。

「それに、一人殺り損ねたしね。まぁ、アレが警察に垂れ込むとは到底思えないけど」

白子は藤乃に聞きはしないが、確信はしていた。彼女はここで強姦されていた事を。
故に、その事実をうまく隠蔽してこの事実を伝えることは可能か？
――――否、無理だろう。まして、あのヤンキーにそんな知能があるとは到底思えない。
仮に出来るとするなら……そう、自分の姉くらいの頭脳が無ければ話にならない。

不意に藤乃が眼下に転がっている死体の身体を蹴飛ばした。
それを見た白子は口笛を鳴らし、藤乃も普段の自分とは程遠い凶暴性のある行動に驚いてしまう。

「わたし、復讐しなくちゃいけないのかしら？」

藤乃は恐怖か、それとも愉悦か、どちらとも付かない表情でぽつりと呟く。
復讐――――その言葉に、白子は藤乃が彼らにされた事に興味が湧い

た。しかし、それを聞くのは酷に思えたので聞きはしなかった。

「復讐するつもりなら協力するっすよ？」

「え……？」

「嫌いなんだよね、こういう事するヤツら。なんてゆーかさ、問答無用でブチ殺したくなる」

藤乃と同じように転がっていた死体を蹴り飛ばす。
しかし藤乃とは違って思い切り蹴飛ばしたため、死体は勢いよく転がり壁へと激突した。
藤乃は数秒呆然とし、白子の顔を見やる。その顔には、底知れぬ憎悪と狂気が同居していた。
しかしそれも一瞬で消失し、次の瞬間には軽薄なそれへと戻っていた。

「で、復讐するの？　藤乃さん」

白子の問いに、藤野は一度だけ深く頷いた。
その顔は長い黒髪に隠れて窺うことは出来ない。
しかし、白子には彼女が浮かべているであろう表情が何となく分かっていた。

「それなら、これを渡しておこうかな」

財布から名刺を取り出そうとしたが、濡れまくっているせいで字が読めなくなっていた。
白子は「最悪だ……」と頭を抱えて何度目かになる愚痴を零し、財布をポケットにしまう。

「電話番号はまた今度教えるわ。んじゃ、此処から出るとしましょうかね――――あり？」

白子はお腹の辺りを抱えている藤乃を見て眉を顰めた。

「どったの？」

「え――い、いや……あの……――――」

白子は彼女の裸体を図らずも見てしまっている。そのため、彼女の腹部に外傷が無いことは確認済みだ。
ならば、内部――つまり、内臓が損傷なし病気に犯されている……？

「……マジに痛くなったら言いなさいな。ヤブ医者くらいしか紹介出来んけど、まぁ何もしないよりはマシだろうよ」

「……はい、ごめんなさい」

「こういう時はごめんなさいじゃなくて、ありがとうって言ってくれた方が嬉しいんだけどなぁ～」

「あっ、ごめんなさい――――じゃなくて、ありがとうございますっ」

「ははっ。いえいえ、どういたしまして」

そんな軽口を叩きながら、二人は廃屋を後にした。

その後、電話番号を教える際に白子が自分の携帯の自慢をしていたのはどうでも良いことだ。

「俺の携帯は防水性なんだぜ！」とか、本気でどーでもいいことだ。

白子は姉の所に行かなければならないので、近くのコンビニで紙とペンを購入した後、藤乃に自分の住んでいるマンションを紙に書いて渡しておいた。

藤乃が自分を頼って来るかは分からないが、頼られなければそれで構わない。厄介事と楽しい暇潰しが一つ減るだけだ。

藤乃と別れ、白子は雨で使い物にならなくなった煙草を道端に投げ捨てる。そして、ふと思った。

「そういや、藤乃さんにアレのタネを聞くの忘れてたな……まぁ、いいか」

水溜りを避けながら、ようやく弱まってきた雨足にホッと一息吐く。しかし、このまま行けば絶対に中へ入れてくれないであろう姉の対応を想像し、白子は途方に暮れた。

あとがき

勢いで書いた番外編。原作と矛盾してないか不安です……。

とにかく、楽しんでいただけたら幸いです。

番外編ー空の境界『痛覚残留2』ー

朝――リビングの壁に掛かっている時計が9時を示している。
昨日、全身を濡らして帰宅した白子はサッとシャワーを浴びて服を着替えると、リビングのソファーに崩れるようにして倒れ、眠りに就いた。
今も寝返りを打ち、手すりの部分に後頭部を預け、背凭れに片足を乗っけて気持ちよさそうに眠っている。
そんな彼の眠りを妨げようと、テーブルに置いている携帯が震え出す。ピリリ、ピリリ、と無機質な音が室内に響き渡った。

「ぅ……あぁ？　こんな朝っぱらから誰だクソッタレ――――もしもし？」

折りたたみ式の携帯（防水性）を開いて通話ボタンを押す。
そして携帯より発せられた声を聞き、一瞬で眠気がふっ飛んだ。

≪お前、昨日来るとか言ってなかったか？≫

女の声だった。その声を白子は知っている。
蒼崎　橙子。血の繋がった実の姉であり、数少ない頭の上がらない相手でもある存在だ。
仰天し過ぎてソファーから転げ落ちそうになったが、背凭れを手で掴む事で何とかそれを凌ぐ。

「えっ！？　いやっ、その、ちょっと色々ありまして……」

なぜかソファーから立ち上がり、直立姿勢のまま誰もいない場所に向かって何度も礼をする白子。
苦笑する顔の筋肉は引き攣っているらしく、そのせいで非常に滑稽かつ不自然な表情となっている。

≪ほう……今、テレビを見ているのか？≫

少々の間を置いて、橙子は言葉を続けた。声のトーンからして上機嫌なのだろう。
愉快に口元を歪めている目つきの悪い裸眼の姉が、白子の頭に何の違和感も無く浮かんだ。

白子は返事をする前に、テーブルの上にあるリモコンでテレビの電源を入れた。
朝のニュース番組が画面に映り、その番組で放映されていた猟奇殺人事件が白子の目に留まる。
キャスターが事件の概要を説明しているが、白子にとってそれは意味の無いモノでしかなかった。

「朝っぱらから気分の悪いニュースっすねぇ……」

≪シロ≫

橙子が不意に自分の名前を呼んだ。そこから感情を読み取ることは出来ない。
白子は「はい」と疑問のニュアンスを交えて言葉を返す。

≪お前が殺ったのか？≫

空気が張り詰めた。手に持つ携帯が、酷く重いモノに感じる。
自分を疑う姉の言動に、白子の眼光は微かに鋭くなる。しかし、なぜか口元は笑っていた。

「……さぁね。仮に俺が殺ったとして、どうするワケ？」

白子の問いに橙子は一笑する。

≪別にどうもしないさ。私は警察でも、まして正義の味方なんてモノでも無いからな。ただ――――≫

「ただ？」

≪ただ、殺人快楽者がお前の事を……いや、お前の共犯者と言うべきか。そいつを狙っている≫

共犯者。恐らく、あの女の事だろう。名前は藤乃だったか。
白子は昨夜の出来事を速やかに思い出す。そして眼を瞑り、微笑しながらソファーへどかりと座り込んだ。

「ふーん……って、何でそんな事オネーサマが知ってんのさ？」

≪私が頼んだからな。知ってて当然だろう≫

「え……はぁ！？　ちょっ、はぁ！？」

数秒の間を置き、度肝を抜かれて目を剥いている白子がテンパッたような声を上げて立ち上がった。
その焦りように橙子はケラケラと楽しそうに笑う。それを聞いた白子は、髪を乱雑に掻いて眉間にしわを寄せた。

≪まぁそんな訳だから気をつけろ。そいつが言うには、自分と気が合えばお前とも殺り合うらしいからな≫

どうやら自分が共犯者であること前提で話を進めているらしい。
大きな溜息を一つ吐き、白子は苦味を噛み潰したような笑みを浮かべた。

「そりゃまた随分とイッてる奴に頼んだんすねぇ……で、そいつは強いの？」

再びソファーに腰を降ろし、煩わしくなったのか白子はリモコンを手に取りテレビの電源を切った。
シン、と静まり返るリビングに携帯電話から微かに漏れる声が響く。

≪強いか弱いかで言えば、強い部類に入るだろうな≫

「俺よりは？」

≪純粋な戦闘力なら圧倒的にお前の方が上だな。最も、真っ向勝負でお前に勝てる人間なんざ片手で数える程度しかいないだろうが≫

「お褒めに預かり至極光栄にございまする」

珍しい姉の称賛に白子は道化のような笑みを作り、道化のような言葉を返した。

≪だが、殺すことに関して言えば、お前より一枚も二枚も上手だぞ≫

橙子の言動に興味を示したのか、白子の眉がピクリと反応する。
そして白子はふと、藤乃の行使していた奇妙な超能力を思い出した。

「なに、なんかスゲェ超能力でも持ってるの、そいつ」

≪ああ。本人が言うには、何でも殺せるらしい≫

「そりゃスゴイ。是非ともそいつの身体を開いてみたいですね」

魔術師なら誰もが思うことを白子は口にする。
恐らく姉も、似たような事を思っているのだろう。
そう思いながら、白子は次の質問をぶつけようとした。

「そいつの――――」

が、途中で声が止まる。

≪どうした？≫

「……やっぱりいいです」

≪――そうか≫

白子が質問を突然打ち切った事に対して、特に興味を示さず橙子は言葉を返す。

彼にとって、今回の事件は暇つぶし以外の何物でもない。
仮に自分が殺されるかもしれない娯楽であったとしても、それは決して変わる事は無いだろう。
とどのつまり、白子は面白ければ何でも良いのだ。どれだけ自分が楽しめるか――それこそが一番重要。

≪お前は式を随分イッてると言ったが、私からしてみればお前の方が十分イッてるよ≫

「それ、褒めてるの？」

≪褒めてるさ≫

「……まぁいいや。それで、式って言うのがオネーサマの雇った殺し屋ってワケ？」

≪ああ。で、いつ頃顔を出せそうだ？≫

「その殺し屋さんが諦めるた頃に行くっすわ」

≪わかった。それじゃ、切るぞ≫

「はいはい――――」

携帯を耳から放し、通話を切ってテーブルの上に置いた。

一息吐き、白子はソファーから立ち上がる。大きく伸びをした後、欠伸を一つして外出する準備を始めた。

シャワーを浴び、髪を乾かして梳き、歯を磨き、服を着替える。

白のカッターに黒いスラックス。その上から前世紀の遺物とも言えるアロハシャツを着込む。

そして白子は鏡の前に立ち、気取ったポーズを取ってみた。……5

秒でアロハシャツを脱いだ。
アロハシャツをソファーに投げ捨て、サングラスを付ける。再び鏡へ目を向け、「よし」と一言呟いた。

「で、どこに行くんだっけ……あれ？」

行く当てが特に無かった白子は、適当に街をぶらつく事にした。
自宅を出て、玄関の鍵を閉める。不意に腹がなり、白子の身体を空腹感が襲った。
小腹も空いたし、手始めに喫茶店にでも行こう――そう考え、白子はマンションを後にした。

あとがき
まさかの番外編2話目。
キリが良かったので、一旦ここで区切らせていただきました。
短くてスンマセン……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9014g/

田中一郎（偽名）の華麗なる人生（笑）

2010年10月9日15時34分発行